

I N D E X

巻頭文

記：石原達夫 代表

山想倶楽部に思うこと

記：森 武昭

山想倶楽部に入会して

記：西谷可江

僕の山との邂逅

記：高橋 聡

山想倶楽部山行記

2013年

5月：東海道池鯉鮒宿歴史

記：高橋 聡

6月：ブナの森の新緑薫る鍋倉山 山行報告

記：菊池武昭

6月：ピレネートレッキング 6月18日～20日報告

記：日出平洋太郎

6月21日～22日報告

記：菊池武昭

6月23日～25日報告

記：石原達夫

6月26日～27日報告

記：武田靱子

7月：谷川岳日帰り登山

記：川村光子

西黒尾根下降隊行動

記：高橋 聡

8月：立山三山～奥大日縦走 山行報告

記：廣島孝子

9月：八海山 山行報告

記：西谷可江

10月：九州の山旅報告

記：高橋 聡

11月：奈良の山旅

記：石岡慎介

12月：忘年山行

記：武田靱子

2014年

1月：新年会の報告

記：高橋 聡

2月：スノー合宿報告

記：武田靱子

スノー合宿報告(スノーシュー組)

記：田矢八策

スノー合宿報告(スキー組)

記：菊池武昭

個人山行：名峰マナスルの山麓をめぐるトレッキング報告

記：川井靖元

写真：表表紙(鹿島槍ヶ岳) 裏表紙(クルマユリ)

撮影：川井靖元

(巻頭書)

石原達夫

このところ、ぼつぼつと山想倶楽部に入会される方があり、活動的な仲間が増えてきたことは誠に喜ばしい。一方で会員の高齢化は進み、すべての会員に納得してもらえる様な山行計画を立てるのは容易なことではない。その対応として会の山行計画の指針ともなる「75歳からの 100 名山」と称するものを選定しようというのだが、考えようによってはなかなか難しい課題である。単純に高齢者でも簡単に行ける山やコースを掲げるということならば、書店の棚に並んでいるハイキング案内書と大差なくなってしまう、当会のユニークさが示せない。しかし選定に当たっては当然違った見方もある。

広く南北の日本アルプスに人気が集まるというのは、これらの山々、特に残雪に彩られた岩峰の夏山が、登山者が抱く山岳というイメージに合うからだろう。登山の経験の浅い高齢者でも、そのような憧れの高山に一度は登りたいと思うのはごく自然な気持ちだ。

日本アルプスの縦走路では、ほとんどの難所には鎖が設置してあるから、時間さえかければ高齢者でもさしたる問題なく登れるという人もいるが、そんな簡単なものではあるまい。鎖は登り降りの手助けのためにあり、安全確保のためではない。加齢とともにバランス感覚も悪くなった高齢者は転びやすいこともあり、もし鎖場で滑ったり転んだりすれば、握力や筋力の衰えた高齢者では鎖によって自身を止めることは難しい。所詮鎖は、安全確保を前提としたヨーロッパ・アルプスのフェラータとは根本思想からして違う。

山想倶楽部では年に何回かはその険しい山にも行く。当会でそれが出来るのは、登山中の危ないところでは、経験豊かな会員が確実なスタンスやホールドを教唆し、必要に応じロープを張り、時にはロープで結んだりして安全を確保するからである。先ずこういうことが出来る人達 - インナーガイドというべき人達 - の存在が山想倶楽部山行の特徴であろう。山想倶楽部スタイルの登山は、結論的にいえば高齢者の体力的特徴を熟知したガイドに導かれた安全登山そのものである。そうすると私らが考える「75歳からの 100 名山」は、ガイドを伴って登るという前提の山がある程度入っても構わないし、何のことはない私たちが日ごろの例会山行で登っている低山、高山もそのものとなる。

畢竟この山想倶楽部撰 100 名山の対象者は高齢登山者だけではなく、彼らが雇うであろうガイドのレファレンス用ということになる。尤も一般登山者がそういうガイドを雇えるかどうかという別の課題はあるが。

「登山の日」の設定は、単に祭日を増やすということではなく、山という場を利用し国民の健康的生活を推進するためのハード、ソフトの整備を含むと理解するが、それならばこれを機会に高齢者の安全登山を可能とするガイド登山を普遍化し、誰でも雇える山岳ガイドの制度を充実することも考慮していただければと思う。

以上

山想倶楽部に思うこと

山想倶楽部会員：森 武昭

私は、昨年6月に公益社団法人日本山岳会（以下、J A Cと略す）の会長に選出されました。昨年2月に尾上前会長から打診があつて以来、一貫して断り続けたのですが、時間の経過とともに、外堀・内堀と埋められ、引き受けざるを得ない状況になってしまいました。しかし、引き受けた以上は、誠心誠意役目を果たすべく努めています。所信や具体的施策に関しては、すでに会報の2013年7月号と10月号に記載させていただきましたので、皆様ご存知のことと思います。

J A Cは、平成24年4月1日から公益社団法人として再スタートしました。最近、公益事業を意識した取り組みも行われていますが、活動内容は殆ど変わっていません。それは、以前の活動そのものでも2／3の事業が公益事業に相応しいと認められたからです。

しかしながら、それはあくまでも結果であつて、J A Cの基本理念は、会創設以来、「クラブイズム」であることに変わりはありません。戦後の一時期、国体の開催や海外登山の許可など行政の役割も担ったことがありましたが、それらの部分は「日本山岳協会」を新たに設立して分離し、日本山岳会はクラブイズムに徹して今日に及んでいます（この詳細については、会報の本年1月号を参照してください）。

J A Cには、理事会のもとに、32の地方支部と17の委員会があります。また、時限を限ったプロジェクトチームやワーキンググループも設けられています。これらの組織は、いずれも法人という組織である以上、必要とされています（個々には、本当に必要な組織であるかは見直す必要があると思っています）。しかし、J A Cの基本理念に最も相応しい組織は、本部・支部を問わず同好会が担っていると私は確信しています。会員が肩書きも経歴も関係なく、同じ目的をもった同好の活動を行うことこそ、クラブイズムの最たるものと思います。今後のJ A Cの活動においても、会員の止まり木として、その重要性はより一層増すものと思っています。

その中であつて、山想倶楽部は、代表の下によくまとまって、クラブ会員の皆様がクラブイズムを十二分に楽しんでいることに敬意を表します。私も出席率の極めて低い劣等生ですが、一員に加えていただいていることを誇りに思っています。会長職を離れたら、再び仲間に入れていただきたいと願っています。それにしても、海外登山、縦走登山、スキー、ハイキング、歴史の勉強ツアーなど実に多彩なメニューを計画・実行するパワーには驚嘆するばかりです。J A Cには多くの同好会がありますが、最も活発に活動しているクラブの一つであることは間違いありません。これからも、事故を起こさないことに絶えず留意しつつ、クラブライフを楽しむことにより、J A Cに寄与していただきたいと願っています。

山想倶楽部に入会して

西谷可江

山想倶楽部の会員として仲間に入れて頂いて、はや1年半となる。もうずっと以前から入会していたような気持ちになるのは、当会の雰囲気がとても温かく、まるで「故郷の我が家にいるような」心安らぐ場であるからだろう。また、私如き新参者にも、山の達人揃いの、経験豊かな人生の大先輩の諸兄姉の全く分け隔てなく温かく接してくださる優しさ、大らかさ。そして、山行時の未熟なスキルなどに対しては、的確な指導をして下さる有難さ。この1年余の山行を振り返る度に、「幸せだなあ」としみじみ思う。

2012年12月の忘年山行「大峯山、上杉謙信の物見の岩にてクライミング」が山想倶楽部入会后、私にとって最初の山行であった。二日間とも天気に恵まれず山行の予定が変更となったが、善光寺や戸隠神社奥社詣は印象深い旅となった。宿舎「ユアーズイン」の料理の美味しさは、山登りと共に楽しみの一つである。その後、「ブナの新緑薫る鍋倉山」「谷川岳」「八海山」「忘年山行・赤城山、榛名山」「スノー合宿」「関ヶ原」に参加した。何れの山行も夫々忘れがたい思い出となっている。石原達夫代表の「生涯登山のすすめ」（日本山岳会山想倶楽部記念誌vol.9）に生涯登山をするための留意事項として4つのポイントが挙げられている。そして、「要は楽しみながら登ることが生涯登山の継続に重要なことである。（中略）山想倶楽部では、生涯登山に対応した山行計画が幾つか企画されている。」と述べられている。私は先述したこの1年余に参加した山行を通して、正にこれらの重要な留意事項がきちんと守られていることを実感する。会員の安全を第一に、その場その場での諸々の状況に応じたベストな判断と、会員相互の温かい思い遣り。私は山想倶楽部で素晴らしい諸先輩と山登りを楽しむことの出来る幸せを有難く思う。

僕の山との邂逅

高橋 聡

僕が山に往き始めたのは高校 2 年の時だから、昭和 32 年の夏からですね。その時は山岳部の一員として、参加したのだが、この時の夏山合宿は、剣から横尾までの縦走と、横尾の定着組で、僕はまだ初めたばかりなので、横尾定着組に組み入れられ、上高地から横尾までかなりの荷物を担がされ、肩が上がりなくなりそうになったことを記憶しています。その当時はザックマヒなる言葉も知らなかったもので、なんで手が痺れて力が入らないのだろうとしか考えられなかったのだが、高校卒業後、法政大学の山岳部に入り、初めて肩の神経が傷んでなる病気だと知ったのだった。今は山に行くと言っても、荷物等はどんなに重くても 10 キロ程度なのでそんな事は全く心配ないですな。

テントの張り方や食事に関しては、学校で練習していたので、それほどことはなかったが、初めて登った山が蝶ヶ岳で、天気も最高に良くて、その頂上より見えた槍ヶ岳や穂高岳の雄大な連山や、屏風の壁に魅入られてしまったのが、山を今まで続けるようになってしまったのが、運の尽きだったみたいですね。

翌日から、槍ヶ岳や北穂高岳、奥穂高岳に登り、涸沢でグリセードの練習等をして。この時は横尾で 5～6 泊したのではと思います。

法政大学には昭和 35 年 4 月に入学して、何もせずノンポリ学生でいても仕方がないので、どうせなら高校の時山岳部で多少とも荷物を担いだり、沢登り等もしていたので、なんとなく、山岳部に入ったのですが、荷物にしても行動にしても、それほどきつくはなかったのだが、僕の言葉使いが悪かったので、それに対しては徹底的に矯正(顔が変形するくらいに)されたようだが、これについては、如何せん性格の変更は出来ず終いであった。

山登りをされていて大きな影響を与えてくれたのは、4 年の時剣岳で夏山合宿の最中にチンネで発生した事故で有ろう。これは午後より三の窓にテントを張っていた岩登り隊が、Hクラックにて滑落して、ザイルが切れて中央チムニーの取り付け付近迄転落し 2 名が死亡したことである。(この時の処理として当時は今と相違して、全て人力で物事をしていたので、事故翌日は天候が悪く何もできなかったが、2 日目は好天に恵まれ現地にいた関大と農大の助けを借りて、その日に一気に千寿原(現在の立山駅)迄下したので有ったが、今ならヘリコプターで僅かな時間で下してくれるが、三の窓のコルより人力で下せと言っても誰も下すことは出来ないのではと思える。

この後当然山岳部は休部状態なので、学生の時殆んど山に行くことがなかったが、この事故の 1,3,17,33,50 等の法会は慰霊碑のある馬場島で行い、ご家族と共にその霊を鎮魂してきた。

日本山岳会には、卒業した年に誘ってくれる人がいて加入し、30 過ぎ迄は仕事も忙しく、山に行っている余裕もなかったが、後輩から日本山岳会に青年部が出来るそうだから、一緒に行こうよと誘われて出席したのが、日本山岳会との拘わりの最初でした。その後青年部と言うよりも正式には青年懇談会と称して活動することになったが、これ

は日本山岳会の中に婦人懇談会なる組織があったので、青年懇談会となった。(現在青年懇談会は発展的解消して青年部と称している)

此処には当時山岳部出身の若手が多かったので、11月に行われた富士山の講習会や岩登り、氷雪クライミング、又は山スキー講習会の時には、講師や世話焼きとして依頼することが出来る人には困った事はなかった。

扨て僕の事だが、それらの講習会には、世話焼き兼講師で出ていたが、30代半ばより岩登りを再開して、その楽しみ(危険性とルート判断、上に行く以外何も考えなくてよいこと)等にすっかり嵌まって山の頂上を目指すのではなく、ただ単に岩登りだけをしていた感があります。冬季には当然冬の剣岳や、穂高の屏風岩に登りに行っていました。冬の剣は赤谷尾根から剣とか、小窓尾根から剣～早月尾根、早月尾根から頂上往復であるとか色々行きました。

又岩登りの相棒としては僕より年長者は居ず、何故か10年から20年くらい年が若い人たちでしたね。今ではあまり登られていない高瀬川の傍に有る唐澤岳の幕岩にはよく行ったものです。

その間大学山岳部の監督やコーチとして学生の事も指導していたので、いかに安全に登山をすれば良いかということも、学生と相談しながら行ってきましたね。

山での事故は亡くなった場合は悲惨ですし、また本人の不注意で何らかの障害(事故や病気)が発生した時でも、周りの人たちが、それに対処できればよいのですが、最近はそのような事が出来る人が少なくなっているのは、事故慣れしていないと言う意味では良い事なのだろうが、やはり多少の事は知識としてだけでなく、実践できるようにしておきたいものです。

年を取れば体力は無くなるが、過去の経験があればそれでも何とか適切に対処できるだろうから、僕は、私は、危ない所には行かないと言っている人達もいますが、穂高や剣の稜線で無くとも危険性の有る所は沢山あるので、機会があれば、可能な限り、一度でなく数度は体に覚え込ますようにして、色々な技能講習にしろ、救助講習にしろ体得する事お勧めします。これは他人の事故に対処するだけでなく、自己の安全に繋がるはずです。

僕が山想倶楽部に入ってから既に7年経過していますが、最初は前代表の中川秀利さんに誘われて入り、最初に行ったのが下の廊下で有った。その後1月の蝶ヶ岳や3月には赤倉でスキー、7月には森吉山での沢登りなどに参加し、山想倶楽部に馴染ませてもらってきました。現在は石原代表の補佐として代表代行となっていますが、煙草の吸い過ぎに因る持病のCOPD(慢性閉塞性肺疾患)の為無理はできませんが、今後とも会員の皆様と楽しい山登りを続けていけたら幸いです。

東海道池鯉鮒宿歴史ウォーキング

池鯉鮒の宿を歩こまい

記：高橋 聡

期日 平成 25 年 5 月 25～26 日

参加者 石原達夫、吉永英明、武田頼子、中野八千代、高橋聡

タイトルの池鯉鮒の宿(シュク)を歩こまいとは、歩きましょうと言う知立地方の方言で有り、池鯉鮒の宿とは、江戸時代東海道 53 次の宿場ができ、知立は江戸の日本橋から約 330Km あり 39 番目の宿となり「池鯉鮒」と書かれるようになる。江戸よりは、歩いておよそ 10 日程掛ったと謂われている。

5 月 25 日



変身後

今回世話役の武田さんより指定されたひかり 465 号に石原、吉永両氏と乗車、列車は、日曜日にも拘わらず、観光シーズンで無い為か空いている。目的地の名古屋に到着する直前に、武田さんより電話があり、名古屋に着いたら北口に降りろとの指示。降りてみると中野八千代さんも待っていた。知立迄電車で行き、知立城址跡の隣にある武田さんの別宅にて昼食をご馳走になり、今回の目的で有る東海道ウォークの為、女性は武家娘、町娘、女芸人に、男性は武家、宗匠、渡世人風にと夫々、形を変えて先ずは記念写真を撮り、すぐ傍に在る知立神社へと向かう。13:10 知立神社は池鯉鮒大明神と呼ばれており江戸時代には、東

海道三社の一つと数えられた名社で、東海道を往来する旅人には、「まむし除け」の御神徳でも知られており、社伝では第12代景行天皇(412年)の創建と言われている。

この神社は毎年5月25日~6月25日迄花しょうぶ祭りが行われているようであるが本年は既に花も殆ど終わっていた。取り敢えず神社に来たのだから何の御利益になるかは不明だが、頭を垂れてお参りをする。境内でサツキの盆栽展が開催されていたが、100年を遥かに越しているものも有り見事で有った。

武田宅迄帰り、ここより旧東海道、鎌倉街道、東海道の松並木等を歩き、杜若で有名な八橋の無量寿寺迄歩く15:00着。



無量寿寺でのカキツバタ

無量寿寺は現在臨済宗妙心寺派に属しており、寺伝によれば奈良時代の慶雲元年(704)の創立といわれているようだ。その後文花元年(1812)に再建され、その時杜若庭園も完成した。境内には八つ橋保存館があり、八つ橋杜若の歴史と文化及び在原業平や方巖売茶竹製笈等数百点の文化財が保存されている。ここの杜若もほぼ終わりに近かったが、日当たりのあまり宜しくないところでは、何とかそれらしい写真を撮ることが出来た。15:30発
本日の歩行行動はここまでとし、武田さんの友人の車で本日宿泊予定のクラウンパレスホテルへ、途中根曲りの松、在原業平の墓所、江戸期に造られた一里塚等を見学。夕食は武田さんが予約してくれていたイタリアンレストランでフルコースを満喫する。

5月26日

本日の行動は本宮山奥社~砥鹿神社~豊川稲荷~熱田神宮の神社仏閣巡りだ。



知立神社にて

朝7:30に武田さんの迎えの車で、三河一之宮本宮山奥社に向かう。(中野さんは昨日夕食後伊勢に帰宅) この奥社は東三河の平野に聳え立つ本宮山(789m)の頂上に鎮座しており、神代より砥鹿の大神様が鎮まっている霊山といわれている。頂上付近の自然林には檫、楠、杉等の樹齢一千年を超える大木が林立しており、又麓から2時間位で歩いてこられる道もあるようだ。次に向かったのは三河国一之宮砥鹿神社の里宮である。ここも奥社と同じく神代日本の国づくりをされたといわれている大己公命(オホミコノミコト別名大国主命)が祀られ

ている。そして次は豊川稲荷だ。

ここは曹洞宗の寺院で正式の寺号は妙厳寺であり、詳しくは[円福山 豊川閣 妙厳寺]と称する寺院で、境内に祀られている

鎮守の稲荷(噸^{だきにてん} 枳尼天)が有名な為一般には[豊川稲荷]の名前で広く知られている。豊川稲荷は神社ではないが、境内の参道には鳥居が立っており商売繁盛の神様として有名で、日本三大稲荷の一つとされているようだ。又噸枳尼天とは、インドの古代民間信仰に由来する仏教の女神であるが、日本では稲荷信仰と習合し、稲荷神と同一視されるようになった。この豊川稲荷の総門の門扉と両袖の扉は千有余年の樹齢を重ねており、高さ 4.5m 幅 1.8m 厚さ 15cm で櫨の 1 枚板で作られ、櫨独特の鱗のような木目が圧巻で素晴らしいものであった。



豊川稲荷大本殿



豊川稲荷のキツネ塚

豊川稲荷へのお詣りが終わったら丁度昼時分、昼食を稲荷参道の食堂で、名古屋のキシメンや豊川稲荷名物のお稲荷さんを戴く。

そして最後に向かったのは熱田神宮だ。熱田神宮は、第 12 代景行天皇の時代、日本武尊が東国平定の帰路に尾張へ滞在した際に、尾張国造乎止与命（おとよのみこと）の娘・宮簀媛命と結婚し、草薙剣を妃の手許へ留め置いた。日本武尊が伊勢国能褒野（のぼの）で亡くなると、宮簀媛命は熱田に社地を定め、剣を奉斎鎮守したのが始まりと言われる。そのため、三種の神器のうち草薙剣は熱田に置

かれ、伊勢神宮に次いで権威ある神社として栄えることとなった。6 万坪もある広い神苑には楠、櫨、榎、棕、銀杏等が豊富にあり、その内で楠は巨木が多く樹齢千年前後と推定されるものが数本あるようだ。最後に宝物館に入り(有料)昔の着物、刀、鏡、書物等を見学。今年 5 月に創祀千九百年を迎えるとされ、5 月 8 日に「創祀千九百年大祭」が実施された。宝物館を出て時間を見るともう 15:00 近い。色々と名残は惜しいが、いざ帰らん。熱田神宮で武田さんと別れ、東京組は一路名古屋から東京へと帰還しました。武田さんには昨日と今日の 2 日間色々と案内して戴き、本当に有難う御座いました。感謝致します。

ブナの森の新緑薫る鍋倉山山行報告

記：菊池武昭

期 日：平成25年6月1日（土）～2日（日）

場 所：信越トレイル（仏ヶ峰～鍋倉山～関田峠）

宿泊所：新赤倉温泉ユアーズ・イン

参加者：石原達夫、廣島孝子、小亀真知子、寺田夫妻、吉永英明、西谷夫妻、小笠原辰夫、横田昭夫、高橋聡、菊池武昭 12名

6月1日（土） ユアーズ・イン集合・泊

16時過ぎユアーズ・インに全員到着。美味しい夕食を食し、お酒も沢山飲んだ。

6月2日（日） 信越トレイル（仏ヶ峰～鍋倉山～関田峠）



トン平にて出発前

高橋さんは足の調子が悪く本日歩かない予定なので、彼が運転手となり、ユアーズインのマイクロバスで、仏ヶ峰登山口の戸狩温泉スキー場の上部にあるとん平へ。ユアーズインのオーナーで有り、われわれ山想倶楽部の仲間でもある、小笠原さんのガイドで10時5分とん平を出発。

スキー・ゲレンデで蕨を取りながら登る。強い日差しにスキー場トップに着く頃には既に汗びっしょりである。縦走路に出てからは、美しいブナの林や雪椿など多くの花が咲き乱れ、暫し暑さを忘れて歩くことが出来た。延々と続く樹林帯のアップダウンの繰り返しの後、14時45分鍋倉山に到着。



鍋倉山頂上

そこには何と今日は山に登らないで、戸狩り温泉の傍で待機している筈の、高橋さんが居てビックリ。車の燃料をいれた後、時間を持て余して下で待っているよりも、関田峠に11時30分頃に上がってきたが、退屈なので歩行距離から換算すると、幾ら掛かっても2時間もあれば鍋倉山には到着するだろうと上がって来たとの事。頂上にて天気も良いので、ゆっくりと30分程休憩を取り、石原さん持参の羊羹を戴き元気を取り戻した。



登山終了後 関田峠にて

鍋倉山からは、待望の残雪上の歩行となり、童心に帰って久しぶりの残雪の斜面を駆け下ることが出来て楽しかった。全員無事に、17時に関田峠に到着し、記念撮影の後、解散した。



水鏡に移る妙高山

ピレネートの山旅

期間：2013年6月18~28日 11日間

参加者：石原 L、菊池、広島、武田、寺田(正)、寺田(美)、日出平の7名に添乗員 山田
意欲満々だった吉永氏は体調不良で最後に参加断念、こっちも残念。

記：日出平 洋太郎

6月18日(火)

出発、NRT→(KL862)→AMS(乗換え)→(KL1313)→TLS

晴 成田第1T、北ウイング8時半集合には YCAT 7時発のリムジンで間に合う。

少し早めに家を出たので 6:40 YCAT 発に乗れた。8:07 NRT 第1T、北 WING 着。早く着き過ぎたなとベンチに座っていたら菊池さん現わる。こっち、こっちと合図をしようとしたが、彼の目線の先には既に皆が集まっていた。搭乗手続きをする列に並んでいたのだ。これはこれとは側に行ったら、山田さんが自動チェックイン機に取り付き、ボクの分もやってくれた。KL862 便 NRT は出発が 10min 早まった。珍しいことがあるものだ。Gate14、席は 63D。飛行時間は 10H50M と機内アナウンス。B747-400、AMS はスキポール空港行き。座ったら早速居眠り、気付いた時は既に Take off、10:45 頃か。時差は-7H。

昼間が長いシベリア上空を行くのは暫らく振り、あまり長いので窓を閉めて夜の気分にして寝る。アムステルダム 14:42(TKO 21:42)安着。飛行時間 10H57M。降機は Gate F7 から。

KL1313 便、AF8265 と Code share、は 20:25 発、Toulouse 行き、KQ1313 Kenya と一緒に、待ち時間が 5H と長い。酒を買う。20:13 20A に座す。KLM City Hopper E190、20:32 Take off、100 人乗り、軽々と飛び立った。21 時を回ったのに未だ明るい。ようやく夕焼けだ。寝入ってしまい危うく夕食を摂り損ねる。22:11 Toulouse 安着。窓が濡れてる、雨だ。22:35 ガイドお迎え。名前はジュリアン、赤と黒を思い出すが元々はイギリス人の由。兄弟が日本人と結婚しているとかで日本人には慣れているのか。22:48 ジュリアンの運転する専用車に乗る。ジュリアン、ホテルの位置を予習してきたのか、ホテルの近くまで来ていながら、窓外を同じ風景が何度も過ぎる。23:23 Hotel de France 着。長い1日だった。24H に 7H を加えた1日である。3ユーロと高いエビアンを買う。23:30 RM 108 に入る。石原 L と一緒だ。

6月19日(水)

今日はピレネー最奥の村、ガヴァルニまで入る予定だったが、2~3 日前からの大雨であちこちで川が氾濫、道路も寸断状態とか。ルルドも洪水で観光客も教会などに避難していて、我らも予定通りにはいきそうもない。今日は何処へ行くのか。

昨夜は遅かったのでゆっくり起きて 7 時朝食。その後ホテルの周りを一人で散策する。ヴィクトル・ユーゴーの名を冠した通りや市場があるが、ここが彼の出身地だと言う事でもないらしい。市場では朝の一仕事を終えた旦那衆たちが空のワイン樽をテーブル代りにみんな一杯やっていた。ワンショット撮らしてもらう。お前も一杯どうだの雰囲気だったが

写真撮影の許可だけ、残念。

10 時には荷物をロビーに集めて市内観光に。市庁舎、青空市場、聖セルナン・バシリカ聖堂などを見学する。赤レンガの色で「バラ色の街」の別称があるトゥールーズは人口 40 万、古いが学園都市でもあり落ち着いて静かな街である。昼食前、市内を流れるガロンヌ河畔に行く。濁流が川幅一杯に流れており、山間部の水害の程が気掛かり。13 時ランチ、スパゲティを賞味。13:40 噴水、メリーゴーラウンドのあるキャピトル広場を抜けてホテルに戻る。



バラ色の街トゥールーズの旧市街、落ち着いた佇まい。



トゥールーズ市内を流れるガロンヌ川、濁流が川幅一杯に広がり氾濫寸前の状態。

ホテルのトイレを借りて 14:18 専用車で出発。道路が寸断されていて、ガヴァルニまでなんてとても行けたものではないらしい。ジュリアンと山田さんが夫々携帯で連絡を取っているが、一々説明がないのでよく分からない。16:45 ルルドも城砦を右手に見るだけで通過、16:45 アルジェロガゾ通過、今は水が引いたようだが川筋は水浸しになったようだ。18:03 ホテル「ラロシュ」St.サバン到着。今日の宿はここに変更だ。当初予定のガヴァルニの 30~40km も手前である。距離だけで比較すれば上高地に入ろうとしたが、松本にも行かない内にストップが掛かったようなものである。百年に一度規模の大洪水とあっては如何ともし難いか。17:13 スーパーへ買い物に行く。明日の昼食、水、チーズなどを調達。部屋は RM 7、部屋は 2 つ、ベッドは 4 ヶもあってファミリー用だ。19:30 夕食 21 時まで。食後、ジュリアンに誘われ、数人でホテルの高みから川の方を見下ろして 30 分程散策。川幅全体が冠水したようだ。

6 月 20 日(木)

今日の当初予定は山小屋泊、ガヴァルニにも行けないのに山小屋に入れる訳もない。明日の宿もこの近くだし、この近辺のトレッキングで時間を潰すのだろう。

曇り。8 時朝食、石原 L に今日まで 3 日間の記録担当を命じられる。荷物も車に突っ込んで 9 時出発、車は増水した川を右岸に渡りへアピんカーブをハンドル切って一気に高度を

稼ぐ。途中 1520m~1630m にはオータカムスキー場あり。9:50 トラマセル峠 1615m の駐車場に到着。3 日目にしてようやく、トレッキング開始と集合写真を撮る。



3 日目にして始めてトレッキング、全員集合

雪溪、ガスってきて道迷い。

10:05 出発、1 時間半ほど歩いたか、1870m ほどで雪溪も出てくる。しかしガスも出てきて、あるべき筈の牧童小屋が見付からない。30min ほどもうろうろしたが、諦めて 200m ほど下ったら天気もよくなって来たので 13 時過ぎ、下界を眺めながらの昼食とする。ここはスイスのアルプと同じで羊の天国だ。みんなガスに巻かれてウロウロしたのがちょっとした気分転換になった。

13:35 出発、ソロソロ出発点に近付いた 14:35 頃、羊群に囲まれる。小さな羊だから怖くはないが、これが牛だったら牛群に埋没しそうで怖かっただろう。15 時駐車場着。



15:05 車発、15:36~40 洪水見学。雨は止んでも依然濁流が川幅一杯を覆っている。地図を見るとガバルニまではこれからが V



羊群に囲まれて。今日のトレックは羊の生活圏
宇谷だ、当分入れる筈もあるまいと思う。

16:08 スーパーで水と地図を買う。16:29 H.
「レ・チーメ」アルジェロガゾ着。明日泊る予定の宿だ。16:50 RM19 に入る。今日、明日

濁流滔々、雨はもう降っていないのに。

とここに連泊だ。靴下洗濯、携帯に充電などして以降に備える。19:30 夕食。

記：菊池武昭

6 月 21 日（雨）



Grottes の鍾乳洞

アルジェレス・ガズスト(Argeles-Gazost)
滞在

今日は朝から雨のため、ハイキングを諦め GROTTE S の鍾乳洞を見学した。9 時 40 分ホテルを出発し、10 時 40 分鍾乳洞着。11 時より 12 時半まで鍾乳洞を見学した。鍾乳洞見学の後半は船に乗ったり、頭がブツカリそうな洞窟をトロッコ電車で疾走したりと変化があり楽しませてもらった。ご婦人方にはモロッコ人ガイドのコミカルな説明・行動が受けていた。帰路

近くの町でランチを食べ 15 時 50 分ホテルに戻った。

6 月 22 日（晴）

ピレネー山脈を越えネリンへ。

今日の当初の予定は、ポルタレット峠（Pueruto de Portalet）を越えてスペインに入る予定であったが、峠越えの道が通行止めになっているため、大きく迂回しオロロンよりスペインへの巡礼道 N-134 を通って、フランスとスペインの国境の峠を越えスペインに入った。

9 時 15 分ホテル出発。オロロン（Oloron Ste Marie）より少々走り、平野より山地に入る手前で多数の車が停車し、長蛇の車列が出来ていた。通行止めが未だ解除されず、12 時解除予定とのことであった。このため 1 時間以上もストップさせられた。やっとスタートし谷間の道を走り、スペインとの国境近くのウルド(Urdos)のピクニックエリアにてランチをいただいた。

此処は廃線になった鉄道の駅の跡地で、草原に椅子やテーブルが置かれ気持ちの良い広場であった。国境越えはトンネルを通らず、



ウルドのピクニックサイト ここで昼食

（この文は前の段落の続きとして、国境越えはトンネルを通らず、

雪を頂いた山々が一望に出来る国境の峠を越えてスペインに入った。



ソムポルト峠のハイキング

る。

その後、N-330 から、N-260 をたどり、トルラ(Torla)に立ち寄り、国立公園で世界遺産のオルデサ(Ordesa)の大絶壁を望む。その後は、ひたすら山道を走って 18 時 35 分やっと宿泊地のネリン(Nerin)に到着した。山中の一軒家のホテル・パラジオ (Hotel・Palazio)、食堂の窓から見る景色が美しい。

ソムポルト峠(Pueruto de Somport)で車を降り、フランス・スペインの国境線に沿って多くの花が咲き乱れる道を進み、直下にカンダンシェ (Candanchu) スキー場の見える展望のきく丘に登った。峠を下り高原状の所まで下った地点で自転車レースと遭遇し少々時間待たされた。今日はよく待たされる日であ



トルラから見る世界遺産オルデサの景観

6 月 23 日



オルデサ渓谷対岸の山、トバコール

せたような奇怪な山、トバコール (Tobacor)、その左にコタツエロが圧倒的な高さで聳える。谷底には明瞭なトレイルが見える。

記：石原達夫

ホテル前に 4 駆が来るという話だったが、何と乗り合いバスになった。荷物を纏めて、ホテルに残し、10 分ほど歩いてバス停に行く。バスは登山者でほぼ満席。7:15 頃出発。ゲートを過ぎると延々とダート道。8:00 頃終点に着く。ピッケルに身を固める登山グループは、直ぐに戻る方向で山に向かう。私らはそれと直角に、世界遺産のオルデサ (Ordesa) 渓谷を望む方向に歩く。程なく、オルデサ渓谷の縁に出る。深さ 1,000 米にもなる断崖で、覗くにも及び腰となる。対岸には帽子をかぶ

目を右に転じれば、雪で覆われた 3 つのマリアというモンテ・ペルディド (Monte Perudido) 3,355 米を中心に、右にソウム・デ・ラモンド (Soum de Ramond) 3,259 米、左にシリンドロ 3,093 米を従える。ガイドの双眼鏡を借りて遠望すれば、ラモンド山直下の雪のカールをペルディドに向かって登る数人の登山者が見える。



モンテ・ペルディドと?持の山

さて私らは、少し緩くなった溪谷の縁をトラバースし、平地に出たところで南下する。まさにお花畑の、ゆるい斜面をパルディナ (Dorrnco Pardina) 溪谷の源頭に向かって歩く。この小さい溪谷の出発点は、直ぐに切り立った溪谷になるところが面白い。右岸に沿って付けてあるトレイルをしばし辿り、トレイルを右に別れ、高みになった展望のよさそうなところで昼食にする 11:40-12:10。ペルディド山は雲に隠れてしまったが、晴れていれば素晴らしい展望であろう。ここからは草原を横断し、バス道のヒツジ囲いのある所で、下りのバスを待つ。バスは満席で 2 人しか乗れず、残りの人はバンにてネリンのホテルに戻る 13:30。荷物を詰め込み私たちのミニバスは延々山道を走りやっとなススケ (Benasque) に到着する。登山基地の美しい街だ。今日のホテルは 4 星のホテル・アネトで、さすがにいいホテルだ。

6 月 24 日



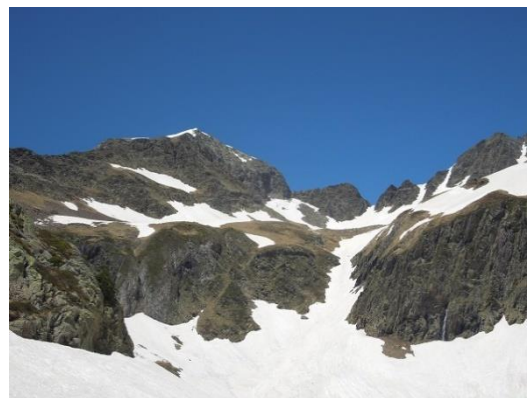
ハイキングの親子、ほかに 2 人いる

快晴。朝食 7:00 さすがに立派なバイキング形式の朝食で、種々のソーセージ、ハム類が並ぶ。7:45 発で車に乗る。途中で見たものは、完全に流失した道路、浸水し破壊された家とうで、洪水のすさまじさが判る。川の流れが完全に変わり、もと川底と思われる応急の仮車道を通り、右折して今日の目的地、ピック・デ・サウベガルデ (Pic de Salvegarde) 山に向かうリオ・エセラ川沿いの山道を走る。だがホスピタル(休憩所の意味)の山のホテルであるホスピタル・デ・ベナスケより先の道

路が破壊され、止むを得ず手前の駐車場に車を止める。これからリオ・エセラ (Rio Esera) 川の右岸をたどるが、トレイルの橋が流されていて川の反対側にあるトレイルに行けない。いろいろ試みるがどうも駄目で、相談の結果ソウベガルデは諦め、引き返して川の右岸に聳える山に登ることにする。直上はカスケード帯のようなので、これを迂回する形で左に大きく回り込むとトレイルが出てくる。これは無雪期に国境の峠プエルト・デ・ラ・グレ

ラ (Pueruto de la Glera) を越えてフランスに抜ける古くからのルートだそうだ。親子 5 人連れの家族が登って来る。荷物はお父さんだけが担いであとは空身だ。お弁当を食べに行くピクニックであろう。

暫く登ると、ソラナ・デ・ゴルグテス (Solana de Gorgutes) カールの残雪帯に入る。最高峰のアネト山は山頂だけ見える。白銀の山だ。当初目的のサウベガルデ山に行くトレイルも見える。途中 50 度くらいの大きなスラブを横断するが、鎖等があるのだろうが高度感を楽しめそうだ。このカールは国境の峠 (Pueruto de la Glera) につながるツカ・デ・ラ・グレラ (Tuca de la Glera) 山を主峰とする国境の山列の懷に相当するところだ。国境越えのトレイルは向かって左側の尾根を跨ぎ、ゴルグテス湖に出てから峠に至るが、今は雪の下だ。



ソラナ・デ・ゴルグデスのカール この手前で昼食

昼時になったので見晴らしのよさそうな適当なところで食事にする。先行の家族は雪を避けた右の尾根のどん詰まりでやはり昼食のようだ。ここが今日の登りの最後で、早速に下山に掛る。急な斜面を見つけてグリセードをするが長くは滑れない斜面だ。トレイルに出て、あとは適当なところから駐車場に向かって降りる。ピッケル・アイゼンは全く使わず仕舞い。駐車地からは、来た道路を戻るが、左手のアカムパメント山 (Tuca de la Acampament) の山腹に大きなホテルが見える。ローマ時代から続く温泉だそうだ。途中洪水の被害地で車を止め被害の程度を見る。ホテル・アネトには 3 時過ぎに着く。8 時の夕食までには相当時間があるので、お茶会をやり、そのあとは買い物とうに街に出る。夕食前のミーティングで明日の山行について変更が知らされる。当初予定のピコ・デ・アラグエル山 (Pico de Araguell) 3,400 米はトレイルヘッドまでのアクセス道路が破壊され登山不可能。代案としてホテルからも見える鋭いピラミッド状の山、ピコ・デ・セルレル (Pico de Cerler) に登ることになった。

6 月 25 日



ピック・デ・セルレルの山容

今日も良い天気、8:30 にホテル・アネトを出る。ピック・デ・セルレル 2,409 米が今日の目的地。車は昨日通った洪水跡の先で右折すると、どんどん高度を上げていく。

突然、ホテル群が現れる。スキー場の宿舎でサルレ・セルレル (Sarlle Cerler) というらしい。右手にとんがったセルレル山が大きく見える。

道路は緩くセルレル山を回りながら登る。山は瓦礫を積んだようで、登れそうにみえない。更に行くと岩壁に鎧われてしまい、これもたやすく登れそうもない。更に回り込むと広大なスキー場が現れ、セルレル山は肩くらいまで樹林帯で覆われていて、登れそうになった。誰もいないスキー場の駐車場に車を停める。このスキー場はセルレル・スキーリゾートで、ベースは1,500米、最高峰はガリネロ2,728米で、その頂上直下までリフトが上がっている。その他4つほどのピークがあり、これらのピークに囲まれた広大なエリアがスキーズーンで、コースは如何ようにも取れそうだ。一度は訪れたいスキー場である。



セルレルの山頂付近を登る



山頂にて

来る。子供たちは、きちっとした登山ブーツを履いている。広いスキー場の頂上コル付近を行くと10人位のご婦人を主体としたスペイン人のシニアグループに会う。聞けば皆70歳以上とのこと、私らと似たようなものだ。こここの草地で昼食とする。芝と思った草は堅くてチクチクして痛い。昼食後は長いスキースロープを下って駐車場に出る。あとはホテルに帰るだけだ。小さな頂きだが、それでも登れたことに満足する。

さて登山は一番右外れのリフトの付け根から上がる。はじめの草地から樹林帯に入り、暫く登ると瓦礫帯に入る。下から見ると山頂はとがって見えるが、このコースから行くと細長い頂である。やっと着いた山頂は、今回のツアーで唯一到達した山頂だ。360度の展望は素晴らしく、左右にピレネーの1位から2位、3位、4位の高山が見える。

これからガレを下ってスキー場に向う。小さい男の子2人を連れたお父さんが登って



最高峰アネト山方面の山々

6月26日

記：武田頼子

3日間住み慣れたベナスケのホテルアネトを午前8時45分に出発し、一路大都会バルセロナに向かう。途中のレストランで昼食、午後3時頃、バルセロナのアヴェニダ・パレスに着く。ここで全行程を運転してくれたガイドのジュリアンさんとさようなら、順番に握手して、フランスまでの1人ドライブの無事を祈ってお別れした。6時にロビーに集合し、街をそぞろ歩きしながら港へ向かう。



港への遊歩道 ランブラス通り

る。

一面に奇抜な衣装を着てジッと動かず、前に置いた空き缶に見物人がコインを入れると動き出すという人たちがいて、初めて見るスタイルに驚いた。私もコロンブスに扮した男性にコインを入れると動き出して、この人はセリフも言い、一緒に「ヴィスタ・アメリカ！！」と叫んでみた。面白い趣向だった。



動く銅像

も解からず、ただHさんの度胸の良さに驚くばかりだった。何はともあれ被害がなくて良かった。

大通りの真中が広い歩道になっていて、屋台や、両側のレストランの屋外席が出来ていて、観光客も町の人もみんなのんびりと歩いている。



途中のポケリア市場

港のレストランで夕食。まだ食べていなかったのここでパエリアを注文する。海鮮とイカスキの2種類を頼み、みんなで食べる。イカスキは見てくれは悪かったが意外においしかった。又、のんびりと歩いてホテルへ帰るが、違う道をとったため迷ってしまい、その上、途中でHさんのウエストポーチを盗られそうになり、それでもHさんは泥棒に一喝してポーチを取り戻した。前を歩いていた私たちはHさんの大声に驚いてふりむくともうポーチを取り戻した後で、どんな泥棒だったかも

6月27日

今日は旅の最終日、7時に朝食、カタルーニア広場から9時に出る観光バスに乗って、サグラダ・ファミリアへ行く。教会の前は半周するほど人が並んでいた。7～8年前に来た時より工事が進んでいたような気がする。



人であふれるグエル公園

それでも何しろ暑いので適当な所で下り、集合場所に行く。バス停へ下る途中のレストランで昼食。又、バスに乗って二階席から街を見物してカタルーニア広場に戻る。ホテルで荷物をピックアップして空港へ行く。これから飛行機の旅が始まる。バルセロナー＞パリー＞成田だが、日本に着くと2日経っていることになる。乗り換えのシャルル・ドゴール空港で5時間もある。

昼とも夜ともつかぬ食事をして、免税店をひやかして時間をつぶす。成田への飛行機は11時間、かなり慣れたが、それでも緊張する。あまり眠れなくて、食事ばかりしていた気がする。成田へ着くと、どうやらその日のうちに家に帰れそう。トランクを宅急便に頼んで身軽になって、成田エクスプレス、新幹線、名鉄と乗り継いで、6月28日の午後11時53分に知立駅に着いた。もう欲も得もなく風呂に入って寝てしまった。

旅は終わった。お休みなさい。



サグラダ・ファミリアの内部

又、周回バスに乗って、グエル公園に行く。ここもあふれるほどの人・人・人……。集合時間を決めて解散。廣島さんと山の上へと登っていく。昔、来た時はここまで登らなかったもので、随分奥が深くて森があると解る。

谷川岳日帰り登山

期 日 平成25年7月20日(土曜日)

参加者 石原達夫、高橋聡、西谷隆亘、西谷可江、廣島孝子、小亀真知子、広島孝子、国分リン、川村光子

記：川村光子

東京駅の上越新幹線乗車ホームで高橋さんと遭遇し、朝の挨拶を交わしていると、西谷ご夫妻もお出でになる。高橋さん曰く此处が発発なのだから自由席で充分とのことであったが、西谷さんが指定席でとの事だったので、同じ車両を私は切符を購入する時依頼。高橋さんは自由席の方へ行かれる。

列車は何事もなく定時に出発し、上毛高原駅に8:27着「そこより谷川岳ロープウェイ」行バスに50分程乗り、ロープウェイ土合駅より天神平駅へ、そこより歩くよりはと、ペアーリフトで天神峠展望へ向かう。リフトの足下には、ニツコウキスゲ、クルマユリが咲き誇り、目を楽しませてくれる。1.502mの涼しい風が都会の暑さを忘れさせてくれた。

谷川岳は地形上の関係で気象変化が激しいことで有名ならしいが、流石今日は登山日和、夏休み最初の休日とあって子供連れも多く、又展望も楽しめるので、観光客で賑わっていた。

10:15軽くストレッチ等をし、案内板の横より登山道が始まる。樹の下のジメジメした階段の路を登ったり、下ったりして熊穴沢避難小屋へ11:05着。ここで少し休憩を為す。ここよりが本日の一番苦しいところで有ろう。急坂を上りつめると明るい黄色の花が目の前に飛び出してくる。何ともかわいらしく、兎の耳に例えられたというウサギキクだ。ゴツゴツした岩場を登り、笹原を只管前へと進む。



頂上への路

左手に万太郎、仙の倉の大きな山群が目に入る。尾根道伝いに進み、時々冷風が頬に気持ちが良い。12:20 第一見晴らしで休憩。眼前の幕岩やそれに続く連山の山並みが疲れた体を癒してくれる。

一面のガレ場をジグザクに登り、前方に大きな標識を見ながら進むが、なかなかそこに着かない。10年ほど前に、天狗の腰掛岩付近にはホソバヒナウスユキソウが沢山見られたが、全然見つけられない。花は絶えたのか、地形も年月とともに変化するのか?

コバイケイソウ一輪を発見、左方に塊で咲いていた。2週間ほど前に秋田駒に行ってきた国分さんの話によると、今年は当たり年らしくたくさんさんの群生を見た来たと言う。

一步一步喘ぎながら肩の小屋着(13:15)広場は結構込んでおり、隅の方で遅い昼食を戴く。



谷川頂上

14:00 国分さんと私は西黒尾根を下降する本隊と別れ 10 分程登って、1,962.2m の標識に到着、写真を撮り天神尾根を復路とする。ケーブルを降りて少し経つと、西黒尾根下降隊の高橋さんより 16:30 に電話があり、未だ巖剛新道との分岐点の先のラクダのコブを下ったところ、最終のバスには間に合いそうでないので、先に帰ってほしいと言われたので私たちは申し訳ないが、先に帰ることにしました。

以上

西黒尾根下降隊行動

記：高橋 聡

扱て、当初計画通りの西黒尾根下降隊の行動で有る。計画書の段階では、下りなので標準コースタイムで計画し、その通りになるものと確信して、登ってきたルートで有る天神尾根を下る前述の 2 名と別れ、西黒尾根を下ったのだった。



天神尾根ザングゲ岩付近

頭の中には三昔前のまだ元気盛りの頃の記憶しかなく、普通に歩いて 2 時間位で下った記憶の為か、現状の体力に対する理解不足の為か不明で有るが、復時はなかった鎖場もいっぱいあるし、又ザレ場もあるし、このルートはこんなに悪かったかなーと思いながら歩いて、巖剛新道との分岐点であるラクダのコル到着が 15:40.ラクダのコブを過ぎると又少し長い鎖場があり、鎖場を登る時は、つながって登って行っても、危険性は少ないが、下りの場合には、一つの鎖に何人も使っていると、

何らかの加減で振られると危ないので、一人一人降りていくようになり、かなり時間を要してしまった。

この先は気を付けるところはないだろうと石原さんと話しながら、ゆっくりと歩いていると、頂上 3 時間。土合 1 時間という標識があるところに着いたのが 17:40。メンバーは後ろに着いてきているものと思っていたが、後ろを見ても誰もいず。声をかけれど応答なし。暫らく待っていたが現れない。この調子だと土合に着くのは何時か不明。かなり遅くなるだろう。既にロープウェイ土合駅より上毛高原駅へ行く最終バスはないので、タクシーを拾うしかない。タクシー会社の電話番号を



ラクダのコル上部

調べてこなかったのが、登山指導センターでタクシー会社の電話番号を聞く為に高橋が先行。指導センターに 18:20 に着いてタクシー会社に電話をしたら、こちらの希望する時間には 1 台しか用意できないとの事。どうしよう困った。そうこうしている内にタクシー会社より 20:20 分ロープウェイ土合ターミナル着で 2 台用意できますとの電話、これで上毛高原駅最終に間に合うとホットするが、未だ後続が下山してこない。どうしたのだろう既に 19:00 を過ぎている。指導センターで聞くと天神尾根を下るのに、遅くなり、懐中電気も持たず、遭難騒ぎを惹起するパーティも毎年いるとの事、心配だ。

電話が通じるかどうか不明だが、取り敢えずかけてみると通じた。高压線が走っている鉄塔付近らしい。そこからなら、遅く共 20~30 分もあれば来るだろう。道路に降りてからどれくらい歩くのか不明だと心配するだろうから、迎えに行くと天神尾根登り口から 200 メートルくらい離れたところに懐中電気の明かりが見える。指導センタ 19:30 に到着。指導センターの前の水場で顔や、泥にまみれた靴を洗い、タクシーとの待ち合わせ場所で有るロープウェイ土合ターミナルに、タクシーがほぼ定刻通りに来たので上毛高原駅最終に乗り無事に帰宅することが出来たのでありました。

立山三山～奥大日縦走 山行報告

記 廣島孝子

コース： 室堂平～立山三山～奥大日岳～大日岳～称名滝

日時： 2013年8月5日～8月8日 3泊4日

参加者： 石原達夫（L） 廣島孝子 廣島友人

今年の夏の山行予定は当初、室堂平～一の越～ザラ峠～薬師岳縦走であったが間際になり、仲間の方々の色々な事情等により石原さんと私だけになってしまう。折角行く気満々であったので私の友人を誘いコースも変更し石原さんにリーダーをお願いし出かける事にした。

8月5日

東京快晴、大町に近づくと雨が降ったり止んだりの空模様、12時30分黒部ダム迄来ると急に雨が強くなる。雨宿りを利用し昼食を済ませ乗り物の人となる。室堂平14時30分着、幸い雨は止んでいる、美味しい水を頂き今日の宿一の越に向かって出発、時折雪溪を踏みしめる心地良さを感じながら・・・山荘16時着

以前訪れた時より小屋は広くなり、それぞれ個室が与えられぐっすり眠れそう、しかし時々雨の音で目が覚め、今日の天気を気に掛けながら朝を迎える。

8月6日

すっかり雨は止んでいるが高曇り視界はまずまず。今日の行程は立山三山～剣御前小屋。



立山から見た浄土山方面の残雪

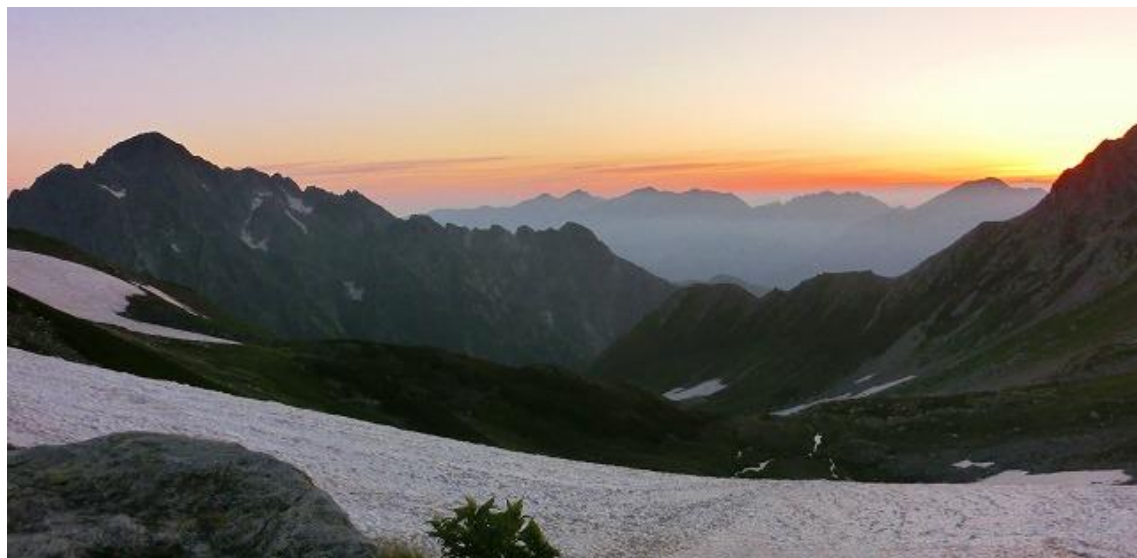
石原リーダーは「昼寝しながら行ってもお昼には着いてしまう」としきりに言う。（甘い甘い私達の技量を知らないなー）とまあく霊峰雄山に向け8時15分出発。足場の悪いゴロ

ゴロした道を 300m 一気に登る。地元の山チルドレン達が登って来る賑やかな声に後押しされながら山バンバも頑張る。ようやく雄山に 9 時 45 分に着いた。神社のお社を仰ぎながら先を急ぐ事にする。此处からは眼下に芸術的な雪とグリーンが織りなす室堂平、明日の行く手の奥大日岳の山並みが見渡

セルンルン気分の山歩きである。
時折ガスが辺りの景色を隠してしまうが大した雨にも遭わず剣御前小屋に 13 時 30 分到着。一息つく間もなく猛烈な雨、滑り込みセーフ、良かった！！夕食を済ませ、談話室で会話を楽しんでいると岳人のカメラマンに来年の夏号に載せるモデルを頼まれる。どのように撮れていますか楽しみです。



霧の立山稜線



別山乗越から見た剣岳

8 月 7 日

4 時 30 分起床、外はご来光を見る人で賑わっている。昨日の豪雨から一転素晴らしい青空である。奥大日～大日岳へ。今回の山行のメインコースです。昨日の学習からか石原さん「早く出発しよう」とせかす。小屋 5 時 50 分出発。今年は雪解けが遅かった影響で待ちわびたお花達が一斉に咲き見事なフラワーロードになっている。特に斜面一面のコバイケイソウをこんなに見たのは久しぶり、上を見上げるとナナカマドの純白の花、きっと秋にはたわわに真紅の実をつける事でしょう。



コバイケイソウの群落

登山客も少なくのどかな稜線歩きが続く、奥大日の登りに差し掛かった頃より雄大な剣岳が見え隠れしながら私達の歩みを助けてくれている。



奥大日から見る剣岳 東大谷

眼下には室堂、地獄谷、弥陀ヶ原の台地が広がり、時折アルペンルートをバスが行き交うのが目に入る。薬師岳が間近に聳え、遠くには槍や笠が岳も見えこのような素晴らしい景観を目と心に焼き付ける事が出来、感謝、感激です。12時今日の予定の宿、大日小屋に着き外のベンチで昼食を済ませる。幸い大日平小屋がガラガラとの事、明日の下りの長さをかながみ足を延ばす事にする。これも早く小屋を出た賜物です。



大日平小屋にて

小屋を過ぎると高度感のある急な岩場を鎖、梯子などを使い慎重に下る。昨日の雨で増水した川を何回か渡り返す事になり、益々我々ナメクジ隊の隊員の足並みは遅くなる。途中すれ違った人は「昨日の豪雨でこの辺りは川と化し宿に引き返し、お陰で今日はクタクタです。」と言っていた。妙に納得する。

やがて緩やかな木道にかかり小屋が近い事を知りホットする。静かな大湿原の中に佇む大日平小屋に 3 時 30 分到着。宿の方々は感じが良く、24 畳の大広間に 5 人とゆったり、夕食は我が家より豪華、お風呂もあり、すっかり疲れを取る事が出来ました。

大湿原を前にしたお部屋からの真っ赤に染まった雲と夕日の沈む様は忘れる事が出来ない一齣でした。

8 月 8 日

最終日、昨日頑張ったお陰で今日はゆったりとした気分で目覚める。大日平小屋 6 時 50 分出発。暫くはそろそろ修理が必要な気を許せない木道歩きが続く、木道が切れるといきなり急な坂道になり、まもなく牛の首の細尾根にでる。ひたすら急降下、昨日大日平小屋迄来たのは正解でした。下に降りる程、風もなくサウナに入っているような蒸し暑さ、唯一下から聞こえてくる滝の音が涼しさを醸しだしてくれているのが救いです。道の傾斜は緩くなるが中々ゴールは見えてこない。9 時 30 分のバスを諦めかけた時、急にアスファルトの道に出る。しめた 10 分程でバス停、間に合った！！富山駅近くのお風呂で汗を流し、いつもより早い帰宅となる。

何よりのご馳走（好天）に恵まれた素晴らしい山行でした。晴れ女も健在です。万歳！！今回の山行を通して、自分の体力と周りの状況が一年毎に厳しさを増す中、このようなんびりとした山行が私の此れからの理想のような気が致します。

ナメクジ登山にお付き合い下さいました石原さんに感謝致します。有難うございました。

八海山山行報告

記 西谷可江

コース：ロープウエー山頂駅～女人堂
～千本桧小屋〈泊〉～女人堂～ロープ
ウエー山頂駅

日時：9月14日～15日

参加者：石原達夫、上村紀子、高橋聰、
菊池武昭、西谷隆亘、西谷可江

9月14日。大型台風18号の予報を
案じながらの出発であった。

今日一日は何とか天気もちそうなの
で、現地にて行動決定ということにな
る。石原さん、高橋さん、西谷可江・
隆亘の4名はMax谷川311号、8時

52分東京駅発に乗車、10時55分上越線六日町駅着。東京から車でみえた菊池さんの
出迎えを受け、米どころ南魚沼市の、たわわに実った稲穂を眺めながら、一路、八海山ロー
プウエー山麓駅へ向かう。一足早く到着の上村さん（今回、山想倶楽部に入会された）と、
ここで合流。若さ漲る上村さんに、ロートルー一同、急に華やいだ雰囲気になり活気が溢れ
てくる。

明日は、雨の確率大で、八ツ峰から新開道を下る予定は変更ということになり、ロープウ
エーは往復切符を購入。菊池さんの事前のご配慮で割引券が使用でき有難い。三連休初日
だというのに、台風日本列島縦断の予報の所為か乗客は疎らである。11時40分ロープ
ウエー発。上信越の山並みの下に広がる魚沼の稲田を眺めながら、標高差 771m を僅か5
分余りで上る。夏場は、麓より5～8度は涼しいとある山頂駅は、今日は、涼しさの実感
はない。秋暑し。山頂駅の傍らにある八海山遥拝所には、木花之開耶姫、八海山大神がお
祀りしてある。霊山の雰囲気をここで先ず感じる。

11時50分、歩き始める。大倉口分岐（四合半）まで木道が続く道を進む。歩くにつれ
て、皆、汗だく。まだまだ酷しい残暑である。コギ池の標識を右に見ながら行くと、
展けた、前上方に女人堂のとんがり屋根が見えてくる。12時45分、涼しい木陰で10分
間の昼食となる。

もう一頑張り。暑いと云えど山は秋。かわいいアキノキリンソウ、リンドウのはっとする
ほどの青さ、ナナカマドの赤い実に、吹き出す汗を忘れる。ススキの穂揺れる六合目の女
人堂は素通りし、急坂を薬師岳（1654m）へと進む。14時30分着。開けた目前に、千本
桧小屋〈9合目〉が見えてくる。八海山大神が、ここにも祀られ、備えられた鐘を突くと
山気に、澄んだ音色が響く。まるで雨に打たれた如く汗でずぶ濡れの一同、14時40分、



薬師岳頂上にて

無事、小屋に到着。二階の大部屋では、先着の若いグループと同室となる。

さて、今日のうちに地蔵岳まで登って来ましょうか（地蔵岳までは、小屋への迂回路あり）との声あるも、一同顔を見合わせたばかりで、ずぶ濡れの衣類を絞り、さっぱりと着替えを済ませ、冷たき良きものにて喉を潤すことに相成った次第。

カレーと福神漬の夕食後は、夕焼け雲をバックに、中ノ岳、駒ヶ岳の遠望に一日の疲れを癒し、ランプの灯りのもと、歓談を楽しみ、21時就寝となる。

9月15日。午前2時頃、目が覚めると、風の音は徐々に強まり、3時頃には、雨音が聞こえだす。4時半、風と雨の音が一層激しくなる。しかし、5時過ぎ、外に出てみると、小雨は降っているものの、遠く山並みに沿って、雨雲の切れ間に朝焼けが一筋の赤い帯となって見える。6時、朝食。予想通りの雨で、今日の八ツ峰行は断念であったが、若い山小屋の主も、この雨では絶対に止した方がよいとの助言。

雨具を装着して7時40分、山小屋を出発。昨日登って来た道を下る。



千本檜小屋を後にして

8時35分、女人堂着。10分のトイレ休憩。雨で濡れた山道は歩きにくい。すれ違いもままならぬ狭い道は、深く挟れて、大雨でも降れば、濁流の流れになるのであろう。

古より八海山は、修験の聖地として登拝講中登山が盛んであるが、下山途中、若い男女をまじえた白装束の5,6人の登拝者に出会った。また、福井や富山からの賑やかな中学生にも 出会い、元気をもらいながら雨上がりの泥濘の山路を下る。10時、ロープウエー到着。空気

が澄んだ秋の日には、展望台から遙かに日本海や佐渡島が見えることもあるらしいが、残念。暫し喉など潤しながら休憩。10時40分発のロープウエーに乗車。菊池さんの車で、六日町駅傍の温泉に直行。二日間の汗を流し、気分も爽快に六日町駅へ。ここで解散となった。

私にとって、初めての八海山山行。八ツ峰の緊張とスリルは味わえなかったけれど、これは、次回の楽しみとしましょう。（スキルアップの鍛錬をしなければ！）皆様と和気藹々と楽しい山行ができ、満足、満足の二日間でした。有難うございました。

最後になりましたが、先導して下さった石原さん、八ツ峰の岩峰に備えて安全確保の為に4キロもの重いザイルなどの登攀用具を運んで下さった高橋さん、車の手配をはじめ、途中からザイルを分担交代して下さった菊池さん、会計処理などてきぱきとやって下さった上村さん。皆様のお心遣いに厚くお礼申し上げます。美味しい八海山を飲む度に、今回の山行を懐かしく思い出すことでしょう！

九州の山旅報告

高橋 聡

日程 平成 25 年 10 月 5 日～9 日迄

参加者 石原達夫、吉永英明、関口興洋、横田昭夫、廣島孝子、寺田正夫、寺田美代子、高橋 聡

10 月 5 日

羽田発 8:05 分発熊本往きに乗る為、7:20 分に羽田の JAL 出発ロビーに着くと石原、吉永、廣島、寺田夫妻は既に到着していた。チケットの予約をしてはい

るが、未だ航空券を手にしていないので、カウンターに予約番号を伝えて搭乗券を発券して貰い、荷物を預け登場手続きを行い、搭乗口に入る

飛行機は 25 分程遅れて出発し 10:05 には熊本空港に着陸。既にそこには岐阜の横田さん、今回お世話になる地元九州の関口さんも見えておられ、レンタカー会社に行って車を借り受けた。車はだれが運転するか判らないので、免許証を持って来ていた人は全員が登録。上空の天気は雲が多く何ともしまらない。阿蘇の山並み処か、少し高い所はすべて雲の中、何も見ることが出来ない。今日はこれから祖母山の登り口にある尾平(おへら)の『もみ志や旅館』迄行くだけ、今の時間は 11:00 だ、宿に行くまで時間はたっぷりとある。

予定では阿蘇山、中岳の火口見物で有るが、本日は亜硫酸ガスの発生が強い為、火口周囲 1 キロ以内は入山禁止との事仕方ない。それでは滝廉太郎の作曲で有名な、荒城の月の借景舞台である豊後武田の「岡城址」に行く事とする。車で走っていると今朝は早かったのも、腹が空いた、蕎麦が食べたいとの意見が出たので、丁度屋号が「馬方蕎麦」で十割石臼引き新蕎麦と書かれた看板を見つけ中に入る。注文は高菜ブッカケ蕎麦であるとか、揚げ豆腐蕎麦、天ざる蕎麦、等々で有ったが、なかなかいける味のようなのであった。

この後は岡城天然温泉「水神の湯」(硫酸塩泉でアルカリ性低張性温泉の表示有り)に入り本日の有り余る時間をゆっくりと潰して、次に岡城址に向うも雨が強くなってきたので、入り口の駐車場で引き返す。道路から見える川は、普段は本当に綺麗な清流だそうだが、昨日よりの雨の為濁流と化し凄まじい勢いで流れている。最後に原尻の滝(幅 120m、高さ 20m 有り滝の上部には田畑や、家屋がある)で有る。此の後はそろそろ時間になってきたので、昼尚暗き杉の羊腸の如く狭くて、くねくねしている道を走って尾平鉾山の傍に有る本日の宿で有る『もみ志や旅館』に 16:30 に到着。早速割り当てられた部屋に入り旅装を解く。宿の方に、お風呂にどうぞと言われても、本日は既に温泉に入ってきているので、入る者は少ない。暫らく休憩後宴会が始まり、やがて 6 時頃となり食事の支度が出来たとの連絡。別棟の広間での食事だ。然し明日の朝食は 5:30 だ。あまりのんびりと飲食をしてはいられない。お酒は先ほど十分に楽しんだようなので、皆早々と食事をし今日は早く就寝だ。

10月6日

昨夜はなんだか一晩中雨がしとしとと降っていたようだ。5:00 頃外に出て空を見るとなんだか、青空が散見されるようだ。台風が来ていると言うが今日一日はなんだか持ちそうだ。昨夜の予定通り 5:30 に朝食を摂り 6:30 に車で出発。3 分も走るとそこは尾平からの登山道の入口であった。ストレッチ等をして体を目覚めさせて、6:40 に出発とする。ここの標高は略 600m、祖母山の頂上が 1,756m その高低差は 1.150m もある。



祖母山登り口の吊り橋

すぐに吊橋が有り、少し歩くと沢の渡渉だ。ここからは頂上まで関口さんの話だとズート登りのようだ。やれやれ COPD 患者でスパイロ検査の一秒率が 50 前半しかない高橋にとってはかなり厳しい一日となってくる。安の定ここから遅れ出して、心臓にペースメーカーを付けている横田さんが僕に付き合っで呉れるが、他の人たちは後ろを振り返りもせず、とっとう行ってしまった。それでも何とか頑張って、稜線のコル(1000m)に 8:40、1.200m に 9:40、宮原分岐の 1.400m に 10:50 に着く、ここで雨が降り出したので、合羽を着けたり、少し腹拵えをしたりして 20 分程時間を取り、前を歩いている連中に追いつかねばならないので、また歩き出す。12:55 に 9 号目の小屋に付いて、中を覗くと居た一。みんな飯を食っている。荷物をここに置いて頂上迄行って、さっき帰って来て飯を食い始めたとの事。ここより頂上往復 40~50 分程度との事。それでは遅参組二人も頂上迄行って来よう。帰路は天気が悪いので、今来た同じ路を行くのだから、沢の渡渉点か、吊り橋近辺で追いつくだろう。ここよりは全て下り道だ。

すぐに吊橋が有り、少し歩くと沢の渡渉だ。ここからは頂上まで関口さんの話だとズート登りのようだ。やれやれ COPD 患者でスパイロ検査の一秒率が 50 前半しかない高橋にとってはかなり厳しい一日となってくる。安の定ここから遅れ出して、心臓にペースメーカーを付けている横田さんが僕に付き合っで呉れるが、他の人たちは後ろを振り返りもせず、とっとう行ってしまった。それでも何とか頑張って、稜線のコル(1000m)に 8:40、1.200m に 9:40、宮原分岐の 1.400m



祖母山 1600m 付近の痩せ尾根を歩く



沢の渡渉

って 14:00 下山に付く。

宮原分岐に 14:50 に着くが休憩をしている時間は無い。急で木の根が張り出している下り難い(登る時は階段になるので楽だが)

路を急ぎに急いでも、もう二人とも 70 を超した爺様だ。思うようにはピッチが上がらない。1000m 地点よりは少し歩き易くなってきて、スピードも上がってきた感じだ。なんだか尾根も終わり沢が左手に見えて来たなと思ったら、遠くになんだかちらちらと動くものがある、先行のメンバーか。そうだ最後に歩いているのは石原さんだ。休みなく下ってきてやっと追いついた。本日の行動で休んだと言えば宮原の分岐で有る 1400m 地点で一度休んだだけだ。追いついた途端に気持ちの箍が外れたようで、何でも無い登りで息が苦しく、足が動いてくれない。ここまですれば終わったも同じだ。あの吊り橋を超えたら、本日の行動は終りだ 17:00 丁度に全員車の所に集結。さあ本日の宿に往こう。宿はここから車で 30 分程の所で上畑地区にある『民宿あんどろ』だ。

宿に付き全員汗と雨の為肌着は当然の事としてズボンや上着迄ずぶ濡れだ。先に女性に風呂に入ってもらい、男性はそのまま、下着を初めとして全ての着替えが始まった。上着やズボンが明日まで乾くだろうか心配だ。干す処といえば縁側で干すしかない。外は雨模様なので湿気が強く、多分明日迄には乾かないだろう。仕方がないか、その時はその時でなるようになれだ。明日考えよう。明日はいよいよ台風が宮崎県にぶつかってくるらしい。となれば登山は中止だ。明日、明後日は観光地巡りかな。

10 月 7 日

本日も天気が良くない、取り敢えずは傾山の登山口迄行く事とする。登山口に到着して関口さんより沢を見ろと言われる。何のことかと思って沢を眺めると、それは、まるで沢でなく滝の如く流れている。登山道は、この沢のすこし上流を何度か渡渉せねばならないとの事。又登山口の案内書の所要時間を見ると、10 から 12 時間も要するみたいだ。我々のスピードでは、12 時間以上要するだろう。又下山後も渡渉せねばならない所も何ヶ所か有るの

全くの空身なので呼吸が楽だ。頂上には 13:35 に着いて写真等を撮って直ぐに小屋に取って返して、置いていたザックを背負



祖母山頂上

で、この水流の激しさでは、とてもではないが、ロープを張ることは不可能だ。ここにきて初めて中止とせざるを得なかった。残念で仕方がないが、安全が優先だ。

これよりは三秀台に有るウエストン顕彰碑、『古事記・日本書紀には天照大神（アマテラスオオミカミ）は弟の素戔鳴命（スサノオノミコト）の乱暴に怒り、天岩戸に籠もられた事が記してあり、その天岩戸を祀る神社と伝えられている。』天岩戸神社や、高千穂峡の古事記の世界に足を延ばそう。



三秀台ウエストン顕彰碑

先ず最初に行ったのが、五ヶ所高原は三秀台に有るウオルター・ウエストンの顕彰碑である。此れは彼が北アルプスに登る以前の、明治 23 年 11 月 6 日に祖母山を登ったのを記念して昭和 41 年に記念碑が建立され、又昭和 47 年に懸鐘式が、昭和 63 年 11 月 3 日に地元の高千穂町と日本山岳会宮崎支部の共催で第一回ウエストン祭が行なわれ、その後はウエストン祭が継続されている。次に向かったのが天岩戸神社で有るが、途中の道路が工事で通行止めとなっており、

迂回路を行き、目的地で有る天岩戸を地図で確認しながら走っていたのだが、何故か元の通行止めの地点に戻ってしまった。熊本空港で借りたこの車には、ナビが着いているのでナビを入れて別の路を行くとしよう。

やっと天の岩戸神社に着いた。入口の社務所で聞くと無料で案内をしているとの事。今拝殿前で説明をしているから、それについて言ってくださいと言われ、付いていくことにする。色々と説明をしてくれて、ご神体の「天岩戸」自体は西本宮から岩戸川を隔てた東本宮のある対岸にあるとの説明だが、生い茂る木に隠れて、僅かに岩が見えるが、どんな形かわからない。（昔は洞窟のようだったらしい）



天の岩戸神社



高千穂峡

次に向かったのが高千穂峡である。高千穂峡は約 12 万年前と約 9 万年前の二回の阿蘇火山活動の際、噴出した溶岩流(火砕流)を五ヶ瀬川が浸食した侵食谷であり、上流の窓ノ瀬から下流の吐合間が中心で、1934 年(昭和 9 年) 11 月 10 日 五ヶ瀬溪谷(ごかせがわきょうこく)として、名勝及び天然記念物に指定され、一帯は昭和 40 年 3 月に祖母傾国定公園に指定されている。又柱状節理のそそりたつ懸崖や、謎を秘めた深淵、湧く岩清水等、よく整備されており、中々高

千穂峡は良い所で有った。そろそろお昼の時間だ。車の中で食べても仕方ないのでベンチを探して食べよう。弁当は昨日止まった宿で作ってくれたおにぎりが 3 ケとおかずが適宜に入っている。山小屋で出してくれる弁当と違い美味い。食後吉永君がやたらと近くを通る美人たちに声をかけている。

昼食後、寺田夫妻は明日帰る予定で有ったが、登山が出来ないのなら、何とか今日帰りたいと言い出した。飛行機のチケットは早割の安いチケットなので、まず交換はできないだろうが、兎に角熊本空港に行って駄目なら新幹線を使って帰るというので、延岡駅まで送る。後で聞いたら台風の為今日帰るのだかと、空港で聞いたら何と 16 時過ぎの便に乗れたとの事、誠にラッキーで有った。残った者たちは明日と明後日は大崩山に登る為に宿を予約してあるので、祝子川(おりがり)の奥にある溪流荘に向かい、宿の手前にある祝子川温泉の「美人の湯」に入湯する。宿に着くと今晚台風が宮崎を直撃するようなので、学校も明日は休みとなっているのに、なんで来たのかと言われるが、仕方ない。明日もここに予約しているので有るが、どこか他所で止まってくれと言われてしまった。以前に台風の為、川が荒れて建物にはそれほど被害はなかったが、建物の両サイドがかなり傷んだらしい。それでも今晚は既に料理は作ってあるので止まってもらうが、明日は勘弁してねと言われる始末。困った。関口さんが何やらどこかに電話をしている。明日の宿の確保だ。明日は久住の久住高原コテージが何とか取れたとの話があり助かった。明日も山は天候が悪く無理なので、ゆっくりと観光だ。

10 月 8 日

本日は本来なら、大崩山に行く予定で有ったが、台風の影響で雨風が強そうなのと、何度も渡渉をしなければならないところもあり、沢の水量が異常に多いので危険と判断し、昨日同様登山は中止とする。昨夜、宿の人に朝食は早く摂って出来るだけ早く出発して欲しいと、言われていたので 6:30 に朝食を摂り、7:20 に本日の宿に向け出発する。今日もなんだか雨模様だ。早く宿を出たのは良いが、今日の宿の久住高原ロッジへ行く途中では、あまり観光で寄るところは無さそうだ。未だ時間が早いので営業をしていない道の駅『宇目』

でトイレ休憩をして、稲積水中鍾乳洞に寄る。

この稲積水中鍾乳洞は日本列島の地層が形成された太古の昔に遡るらしいが、鍾乳石の発達が始まったのは、今から 30 万年前とされており、凡そ 8 万 5 千年前におこった阿蘇山の大噴火によってこの鍾乳洞は完全に没したのであるが、その後昭和 51 年に、ダイバーによる調査と、観光開発が始まり、昭和 52 年 10 月に観光洞としてオープンした模様だ。

中に入って鍾乳洞の中を拝見させてもらったが、まだこれから長い時を掛けないと、鍾乳洞独特の雰囲気には難しいような感じであった。9:00 ~9:40

次に寄ったのは、またまたトイレの為に寄った道の駅『たけだ』で有った。売っているものを冷やかして時間を潰すも、潰しようが無い。そんなに腹も空いていないが横の方に食堂があるので、未だ早いけど昼飯にでもするか。

昼食後本日の目的地で有る久住高原コテージに向かう。途中にあった久住花公園はガスの中だ。これでは寄っても仕方ない。明日もたっぷり時間があるので、明日ゆっくりと楽しむことにしよう。

ここよりは直ぐに今夜の宿で有る久住高原コテージに到着 12:20.まだ時間が早い為、入室はできないが、温泉の方には入れるとの事で、温泉にゆっくりと親しもう。通常入室は 3 時からのようなが、2 時前に入室が認められほつとする。

本日の夕食は豊後牛、宮崎地鳥と野菜のバーベキューだ。厚めに切った豊後牛が、大皿たっぷりと載っている。この年寄部隊で食べきれるか不安だ。残すには出してくれた人に失礼だ。何とか食べてしまおう。デザートはカボス入りのシャーベット、お肉を腹いっぱい食べたので、後口が良くこれが一番おい気分だ。



久住高原コテージ



久住花公園

10 月 9 日

本日はこれで九州ともお別れだ。昨日入口だけ見た久住花公園による。ここは 22 万 m² の広さが有り、春から秋にかけては 500 万本もの花が咲いているそうである。この時はコスモスやサルビアなどの他色々な花が咲いており、園内すべてを見て歩くには、少し骨が折れそうになってしまった。続いて大野川水系の玉来川源流で有る池山水源に寄って見た。ここは水温は常に 13.6 度を保ち、又絶対に枯れることなく毎分 30 トンの水量が湧出していると言われてい、全国名水 100 選に入っていると有った。

此の後は日本三大楼門と言われている阿蘇神社に向かう。この阿蘇神社は社記によれば、阿蘇神社の創立は孝霊天皇 9 年(紀元前 282 年)と伝えられているようで、お祀りしてある神様は 12 座有り、その中でも歴史書に記載されているのは、健甕龍命(神武天皇の孫神)、阿蘇都比咩命(健甕龍命の御妃神)、国造速瓶玉命(阿蘇初代の国造)でありこれらの神様の陵墓と伝えられている古墳がこの阿蘇神社より 3 ㌦程離れた地点(中通古墳群)に点在しているようだ。



阿蘇神社

此处より熊本空港までは幾らもかからない。飛行機の搭乗時間は横田さんが 16 時過ぎで関東組は 18 時過ぎだ。まだまだ時間はたっぷりと有る。そろそろ昼飯時だ。みんな蕎麦が食べたいと騒いでいる。来た時の蕎麦やを探すがなかなか見つからない。通り過ぎたかなと思っていると暖簾が見えた。やっていると良いのだが、なんだかおかしい。よく見ると本日休業と書かれた小さな札が出ていた。これでは仕方ないので諦めて他を探そう。

暫らく走ると饅頭の看板があったので取り敢えずそこに入る。何かメニューの書き方が変わっている。まあいいか頼めば何か来るだろう。来た来た注文の物が来た。一口食べてみる。意外と行ける。あっという間に腹の中に納まってしまっしまい、なんだか物足りないが、飛行機が出る迄まだ 5 時間もあるのだ。後は空港で又何か食べるようにしよう。

空港には 2 時過ぎに到着。ここでひとまず解散式とした。関口さんには何から何まですっかりお世話になり有難う御座いました。又今回登れなかった山を来年行きたいと考えておりますので、その時も又よろしく願いいたします。

奈良の山旅

随想 大和の里山、古事記の空を訪ねて

～幾光年昔の光いまさして～

秋高气爽となった11月初め、知立の女性岳人のご尽力で奈良はまほろばの地に史跡を訪ね、聖山に登ることになった。折りしも東アジア文化圏で飛鳥・藤原京都を中心に日本国誕生を世界遺産とする気運の高まりと響きあっていた。

労働日真っ只中の山行だが、生涯現役の岳徒らにとってはすべて心得、柿日和の道すがら聖俗蛇行する山想セブンである。

わが身をひきずり逃げぬ秋の蛇 (今村晩果)

平成23年倶楽部の奈良大和路行を思い出していたが、再び遥か古代に踏み込んで往時を偲びながら、山を想い、人を想う同好の^{よしみ}誼は躍如としていた。

11月5日(火)京都駅で落ち合いJRブランド「万葉まほろば線」に乗り換えると^{ひな}鄙の大和盆地のゆかしさに抱かれ、悠久の大和、飛鳥にタイムスリップする。調べるとまほとは真秀と書き、まほろばとは丘や山に囲まれ抜きん出てうるわしき大地とある。

大和は国のまほろば、たたなづく青垣山ごもれる大和し美し(古事記)

幾重にも重なり合った青い垣根のような山々に囲まれる大和は本当にうるわしいな・・・とは倭建命の山想である。

卑弥呼史蹟とか三世紀中頃中国・魏伝来のベニバナ花粉発見で知られた^{むく}纏向、京とこの辺

りでお別れとばかりの^{きょうばて}京終を過ぎて三輪駅が旅の基点となる

。名物にゆーめん昼食をとり、幽玄な趣がただよう^{おおみわ}大神神社に参拝してから裏手の三輪山を目指す。古代豪族の大三轮氏の所領で仏教伝来以前の原初信仰の地である。罪や穢れを祓ってもらい^{にぎみたま}和魂を祈願する聖山なので、花粉すら人を、世を穢すとか素朴な「はなしづめ」の祭りが



大神神社拝殿

今に至るまで継承されているとは驚きであった。

三輪の里狭井のわたりに今日もかも花鎮めすと祭りてあらむ（皇后陛下）



拝登の入口

美智子さまがこの地を訪れ、昭和 50 年歌会始で詠まれていた。

標高にして 467 ほどだが、登拝道としてよく整備され二人の工人に出会った。「お山そのものがご神体だから静かに登ろうよ！」と声かかるが、相も変らぬワイガヤ一団である。1 時半出発して途中三光の滝に打たれている青年が何か唱えていた。清めの行なのだが、星、月、太陽の三光とはどんなつながりかわからなかった。1 時間ほ

どで山頂の奥津^{いわくら}岩盤につく。大和盆地の南東に位置し縄文・弥生のころから自然崇拝の日本最古の神社である。津とあるから湧き出るご神水があり、霊験をいただく聖水思想によって、古代人も六根清浄登拝していたのだろう。しかし自然界の精霊信仰を離れると、たかぶる情念の虜となった古代姫君は、このお山を覆ってたなびく雲との掛け合いを人情物とする舞台ともなっていた。

三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなもかくさふべしや（額^{ぬかた}田^{のおほきみ}主）

名残惜しい三輪山をどうして雲があんなに無情にも隠してしまうのでしょうか、人はともかくせめて雲だけでもやさしい情けがあってほしいものです。なつかしい三輪山をあんなに隠すべきでしょうか・・・と天智、天武兄弟二天皇の寵愛を受けた姫王が、何故に男ころのうつろいを嘆いてみせているのだろうか。

第一夜は櫻井駅前の皆花楼である。聞くと 120 年の由緒ある旅館で四季折々の花盛りは見事であろう。「あれに見えるは雲か、山か・・・」と頼山陽の詩文、犬養木堂の揮毫した「山上の松」の扁額はこの家のお宝と観えた。

翌日 11 月 6 日（水）談^{たんざん}山神社が鎮座する大和多武^{とうみね}峯に向かう。大化の改新発祥の地とある里山で談の山とも後世よばれている。かたらいとは何事と思いきや、暴虐の限りつくした大豪族蘇我父子を誅伐する密議が中大兄皇子（後の天智天皇）と中臣藤原鎌足が多

武峯山中でしていたというのである。飛鳥文化の王朝^{みやび}雅と血なまぐさい政争の舞台が山静世界で繰り広げられていたことになる。秋には蹴鞠祭りもあるようで、木造十三重塔が紅葉に映えていた。

展示品の中で、天正になって和歌の教養あるとも思えない徳川秀忠が菅原道真のお歌を利用し時の御陽成天皇に編旨した直筆墨書が残っていた。

心に誠の道にかないなば祈らずとも神や守らん

その時代の権力者にとっては、万世一系の天皇家を利用し利用される確執は、古代から近世昭和維新まで絶えることはなく続いてきた。

入山料をまた払って裏山の御破裂山に向かう。コウヤマキやミズキの巨木を見上げながらなめ沢のすがしい流れが心地よい。標高 607 ㍎のその名もただならぬ御破裂とは、天下異変、不祥事があると神山鳴動して御神像に亀裂が入るとか凶事に由来するという。陰鬱な空気ただよう頂上には、戦勝祈願なのだろうか昭和 5 年の登拝記念の石柱があった。明治維新後日清、日露の戦勝に酔い痴れ、驕慢列強の仲間入りしたこの国は、昭和に入ってから奈落の底へ落ちる運命の開幕である。支那大陸に夢と野望を求め、日中の憎悪殺戮の連鎖は昭和 6 年満州事変、12 年日中全面戦、15 年日本最盛の紀元節を迎え、昭和 20 年になって大東亜戦敗北まで 15 年戦争への序曲となったのだ。中国古典「書経」から学んだ「百姓昭明、万物協和」どころではなく破裂、破滅の道をひた走る。国家に奪われた戦争の不条

理に、国民一人ひとり^{あらが}抗えないと近代史は教えているのだが……。

早々に退散し一路飛鳥へと 3 ㍎林道歩きである。新年書初めで著名となり 105 歳で帰天された大西良慶と上誕生の地をすぎて、熟した柿をこっそりいただきながら、1 時ころ百笑知へ出た。ススキを揺らし熟れた柿黄葉のおだやかな日和は至福であった。

柿日和歩みあくなきいま飛鳥 (石 讃岳)

明日香村上居の石舞台古墳と家形石棺安置処を訪れる。時代は一挙に近世から 1400 年前に遡ったが、蘇我馬子の墓所とかいわれている。2300 トンとか巨大な天井岩が露出して壮大であったが、権力者の末路はいつでも、だれでもあわれである。



飛鳥の柿日和



明日香村 石舞台古墳

この辺りから自転車ハイクに切り替え爽快に走る。2時半には岡寺仁王門に着く。シャクナゲ、

サツキの年輪木に迎えられた日本最初の^{やくよけ}厄除

観音である。次に坂を下って飛ばすと飛鳥寺である。朝鮮百済から仏教文化が伝来し、未開のこの国にとって夜明けとなる。日本初の瓦葺き寺院とあり、隣国朝鮮の技術、職人によってすべからく学ばせてもらった経緯がこの寺を象徴している。

鼻高く、面長の本尊大仏は、日本人ばなれしてとてもエキゾチックな顔立ちであり、また古墳時代の黒曜石文化から離陸せんとするこの国としては銅と錫合金による釈迦如来坐像の建造などおそらく新技術だったのだろう。百済の威徳王の命を受けて大勢渡来した工人達は故国に望郷の念にかられながらも、

この国のために骨身惜しまなかった隣国へ想いが^よ過ぎった。思うに支那大陸や朝鮮半島と古代から何十世紀にも渡って繰り返された隣国との悲劇は、今も繰り返すのか、近現代を紐解くカギが潜んでいるような奈良盆地であった。



飛鳥大仏



蘇我入鹿の首塚五輪塔

田畑の中に蘇我入鹿の首塚という五輪塔もあった。一同元気そのものでサイクリング拝観が続く。奈良を訪れるといつも歴代天皇御陵となるのは、山想倶楽部に宿る不可思議な日本魂である。最近今上陛下、皇后陛下の究極の終活が話題になっているが、最初に訪れたのは7世紀後半の天武天皇・持統天皇の檜隈大内陵である。天武天皇陵に合葬されているのは建造費の簡素化とか、持統天

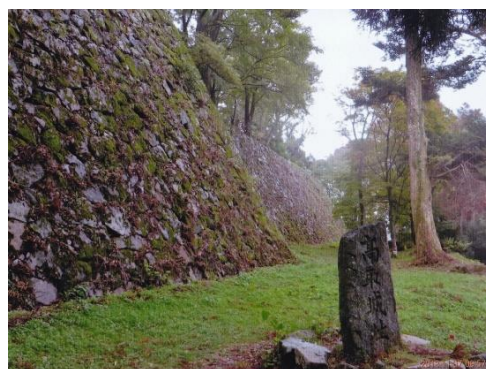
皇は最初の火葬天皇であったという。女帝は皇位をめぐり異母兄の天津皇子と実子の草壁皇子との権力闘争の中心にいたとかリーダーが触れていた。その次は百済の聖明王の使節によって仏教が伝えられた6世紀後半の欽明天皇の陵墓へ回り、最後に光徳・皇極（斉明）天皇の母君吉備姫王を拝観した。いずれも自然の地形を生かして陵碑は鎮守の森のような常緑樹林の中に簡素に佇んでいた。

その夜は飛鳥駅から数分の高級ペンションである。おしゃべり満開の岳兄、静かな聴き上手のご婦人が微笑む倶楽部ライフは、美味なステーキディナーに舌つつみを打って一層盛り上がった。語らいの中で、70～80代にふさわしい百遊山ならぬ「75歳からの百名山」出版構想が披露された。登山下山で4～5時間歩程、湯郷、旧蹟めぐりなど含むが、全国仲間の力もらって選定編集がもし実現すれば五輪を観戦するまでは老いを楽しむエネルギーの証となるのだろう。

飲食をともにし語り目を合わすささやかごとが今有り難し（三枝浩樹）

最終日11月7日も全員快調である。タクシー2台で一挙に大和高取山登山口まで走らせる。ドライバーから土佐街道沿いの昔ながら町並みの説明を受ける。1時間ほど国有林を縫って高取城址に着いて三等三角点に手を置く。築城術の粋に感嘆しながら、豪壮だったろう天守閣をイメージする。戦国時代から江戸譜代大名の時代へと生き延びた山城は、今は荒れ
放題、^{つわもの}兵どもが夢の^{あと}址であるが、樹齢500年以上の巨木や実生から生を得た木々が石垣を食むように生き抜いていた。日本三大山城として、美濃岩倉城、備中松山城とともに記録に留める。

土佐街道にまた戻って愛くるしい山中五百羅漢をたくさん観ながら、壺坂寺に向かう。真言宗の西国霊場第6番の札所である。近年インド渡来の壺坂大仏は藤原京の大極殿から直線状に位置し弥勒浄土となっているが、インドゲテモノなどと中傷も耳にした。どうやらこのお寺は、メグスリノキの煎じ薬を味わい、浄瑠璃物語の切ない夫婦愛に想いを寄せる縁にすれば十分であった。



大和高取山城址



壺坂寺

「妻は夫をいたわりつ、夫は妻をしいつつ……」の夫婦道を想い浮かべながらバスで奈良中心街に出る。さすが古都で、異人さんもたくさん見かける。有終の拝観処は 1300 年を超える歴史を持つ興福寺の国宝館である。懺悔修法の六道六界の天平彫刻から鎌倉の雄渾な金剛力士像など印象深く、時の経つのもしばし忘れるほどであった。特に目玉となった阿修羅像の青年をじっくり観ていると、自分を見つめる沈着さと目的に向かう意志の強さを宿しているようだった。仏教文化の真善美を顕

す名宝とか PR 誌にはある。

こうして熟年世代にふさわしい古都の里山・史蹟を訪ねる「天高く、遊子楽しむ」旅は終わった。山は神である太古の自然信仰アニミズム、飛鳥白鳳天平と続く気品あふれる仏教文化、中世戦国から江戸へつながる骨太なサムライ日本の源流を垣間見る企画であった。日本精神のよすがを辿り、魂が洗われるような旅に感謝深謝である。訪れたたくさんの処、ひとつひとつが心の風景となって帰郷後の 7 人岳徒にやさしく映っているにちがいない。

名利を立ち去るとき掲示された法句経が目に入った。

「楽しみと苦しみから解放された者には、悲しみも恐れもない」……。

前を向いて先へ、先へと歩め、さらなる結びと深まる霊の交わりのためにとでも教えているのだろうか。

平成 25 年霜月 大和まほろばの里にこの国を想って

石 讃岳

参加者：石原達夫、武田鞆子 高橋 聡、吉永英明、
石原夫人、川村光子、石岡慎介

忘年山行

記：武田鞆子

日 時 平成 25 年 12 月 12 日(土)～12 月 13 日(日)

場 所 黒檜山(赤城山)～榛名山

参加者 石原達夫、高橋聰、醍醐準一、下河辺史郎、田矢八束、寺田正夫、寺田美代子、小亀真知子、日出平洋太郎、小笠原辰夫、西谷可江、川村光子、菊池武昭、武田鞆子

12 月 13 日

車でこようと考えたが、道路に雪があると嫌なので、電車で来て前橋駅前で前泊する。群馬県庁の展望台で、明日登る予定の山々を見渡し、前橋自然公園を散策したりして、一人でのんびりと一夜を過ごす。

12 月 14 日

8 時 22 分に首都圏組が列車で前橋駅に到着。石原さん、下河辺さん等の車組が、本日の待ち合わせ場所である赤城ビジターセンター迄乗せてくれる。

町の中は、雪など全然見当たらなかったが、赤城山道路へ入ると林床の雪と日陰の道路に氷が出てくる。何度か滑ったようだが、無事に赤城ビジターセンターに 10 時少し過ぎに到着。小亀車が少し遅れるとの電話。ビジターセンターの食堂に入り、小腹の空いた人は、うどん、おでん等で少々の腹ごしらえ。11 時過ぎに全員がそろい、黒檜山登山口から登山開始だ。スパッツを付けたりして歩き出す準備をしていると、少し先に上がって行った高橋さんから、アイゼンを付けた方がいいとの伝言。又アイゼンを用意したり着けたりのゴタゴタがあり、出発は 11 時 40 分になってしまった。

頂上はこの時間ではとても無理と最初から判った登山と言うのも気合が入らない。それでも久しぶりの雪とアイゼン使用になんとかワクワク・・・12 時 30 分頃、頂上を望む小広場で昼食。



黒檜山を背にして



黒檜山の下り



夕食後の大おしゃべり会

ここを今回の頂上として 1 時頃下山開始、一人頂上に登って行っていた小笠原さんに連絡して、全員下り始める。途中で小笠原さんがグループに入っているのに気が付いて、その足の速さに驚く。

道の凍らない内にと赤城山を下り、榛名湖に上がる。3 時少し過ぎに今夜の宿レイクサイドゆうすげに入る。早速温泉で暖まり、臨時の例会を開いた後は待望の夕食。食後は一室に集まり、大おしゃべり大会、これが山想倶楽部の一番楽しい時間だ。

12 月 15 日

本日は湖畔の宿記念公園迄車で行き、そこより歩きだ。私たちが出発の準備をしている間に、今回幹事の田矢さんと高橋さんが、はっきりとしない登り口を探してくれている。8 時 55 分登山開始。地図に急坂とある熊笹に覆われている道を約一時間、本当に急坂続きだ・・・枯葉に少々の雪。ときどきズルット滑る。メイン登山道に出会ってからは、熊笹に少し積もった雪と裸木の路。気持ちよく歩いて 10 時 15 分榛名山最高峰の掃部ヶ岳に着く。



掃部ヶ岳頂上

第二グループを待って記念写真を撮り、10 時 30 分に杖の神峠を目指す。左手に時々榛名湖を望む美しい路だが、時にもの凄い急斜面がありのんびりと景色を見てられない。

11 時 45 分頃神の杖峠に到着。当初の予定では、ここから杏岳を目指す予定だったが、往復 2 時間にかかるので諦めて、雪の上に第二グループへここよりは下山するとのメッセージを残し下る事とする。林道の途中で風もなく陽の当たる草地で昼食を摂っていると、第二グループも来たので一緒に車を置いてある湖畔の宿記念公園の駐車場へ下る。駐車場では、そのまま帰る人、宿の風呂に入りに行く人等と別れて今回の登山を終える。

山想倶楽部の山行は、時間と体力に合わせて、頂上には拘らない。年のせいか此の頃はそんな山行がとても私には合う気がする。

新年会の報告



記：高橋 聰

日 時：平成26年1月15日（水）午後6時～8時半。

場 所：飯田橋「かくや」

出席者：石原達夫、川村光子、菊池武昭、高橋聰、下河辺史郎、沢井靖元、上村紀子、田矢八束、寺田正夫・美代子、吉永英明、西谷隆亘・可江、小亀真知子、大塚幸美、以上15名。

高橋 聰の司会により定刻を少し過ぎた 18:10 分頃より始まり、石原代表による下記のような挨拶と乾杯の下に、宴が始まり、昨年入会して未だ互いに名前と顔が一致していない方もいたので、各自の自己紹介等をなし、和やかに実施された新年会も 20:30 にお開きとなった。

石原代表挨拶

山想倶楽部の皆様明けましておめでとうございます。

今年もどうぞ宜しくお願いいたします。

昨年の山行は、天気恵まれず、途中変更等があったケースが幾つかありましたが、それでも参加者一同、和気あいあい、楽しい山行となりました。

今年も皆様のご協力を得て、シニアにふさわしい山行を計画したいと思います。

夏には、アメリカ北西部の国立公園をめぐる、山想倶楽部ではなければ出来ない取っておきの山旅を計画したいと思います。

今年から本格的に取り組みを始める「75歳からの100名山」は山想倶楽部の皆様の優れた感性と、ユニークな感覚を生かして、誰でも納得出来る100名山を選び、順次踏査したいと思います。

改めて申すことではありませんが、山想倶楽部は山を楽しみ、人の和を楽しむ人たちの集まりであり、ここでは一切のエゴやポリテックスは存在しません。

それでは今年も山登りでシニアライフをエンジョイし、かつ健康増進に努めましょう。

2. アメリカ北西部の国立公園をめぐる山旅

ここなら絶対天気心配する必要はないというユタ州の国立公園を主体としたもので

ブライス・キャニオン、ザイオン、アンテロープ・キャニオン、レイヤー地区、とう

のハイキングコースをめぐる。いや聞いた名前だなと思われそうですが、

すべて絶景の観光地ですが、私共は上辺だけ見る観光客とは違い、その奥のトレイルをたどります。レイヤー地区は最も人の来ない場所です。

詳しくは、いま計画中ですので決まり次第発表します。

出発は6月10日前後、約10日間のコースとなります。費用は最大35万円程度です。

今のうちから予定に入れておいて下さい。

3. ヨーロッパのスキー

あまり有名すぎて日本人うじゃうじゃの場所は敬遠し、オーストリアアルプスの

ふところにある、山想倶楽部らしい場所を選びました。

出発は3月14日で基本8日間です。費用は基本旅行費30万程度、その他に

食事代、リフト代、レンタルスキー代がかかるようです。

これについては後日別途に案内を致しますので、ご参加をお待ちしています。

スノー合宿報告



集合写真(ユアーズインにて)

スノー合宿報告(スノーシュー組)

記 田矢八策

参加者： 石原達夫、横田昭夫、小亀真知子、西谷隆亘、西谷可江、高橋、聰、武田靱子
田矢八束、廣島孝子、菊池武昭、清登緑郎、小笠原辰夫

2月1日(土)晴

懇親会参加の為、長野新幹線で長野駅へ向かう。長野で信越線のホームに行ったら武田靱子さんとバッタリと合い、妙高高原駅へ。駅に着くと高橋さんが駅前の蕎麦屋さんより出てきて迎えてくれた。蕎麦屋に入ると菊池さん、清登さんもいて蕎麦を楽しんでいる。僕たちも一緒に丼に盛られた蕎麦を楽しみ、菊池さんの車に同乗し、いつも世話になってい

る宿舎で有るユアーズ・インに到着。高橋、清登、菊池の3氏は赤倉スキー場へと向かい、ウオーキング組の僕たちは、後から到着した西谷ご夫妻と4人で、裏の雪原をスノーシューの足慣らしとして、スキー場入口近辺迄歩き回った。誰も踏んでいない雪原を歩くのは久しぶりで実に気持ちが良い。

この間に石原、横田、小亀の各氏も到着。スキーに行っていた3人組も16:30には帰ってきたので全員集結。夕食はいつも通り18時より有る。その間思い思いに温泉をゆつくりと楽しみ、部屋では早くもお酒を飲んでいる人たちもいる。食後は食堂でお酒を飲みながら22時頃まで楽しい歓談だ。

2月2日(日曜)晴

6時に起床、天候は週間予報では雨だったが、外を見るとなんだか心配なさそう。朝食後出発し、腹の調子が悪い高橋さんを残して、赤倉スキー場まで、小笠原さんの車で送ってもらいスキー組(石原、菊池、横田、清登)とスノーシュー組(西谷夫妻、小亀、武田、田矢)に別れる。

スノーシュー組は小笠原さんの案内で、いもり池に向かう、踏み後のない雪原と樹林の中を一時間程闊歩して、ゴルフ場と思われる広い雪原に出て、右上して樹林の中を進む。

暫らく歩いているとなんだか音楽らしきものが聞こえてきて、着いた処は池の平スキー場だった。ゲレンデを下り食堂に入り昼食だ(11:50~12:20) 食後は車道を15分くらい歩きいもり池へと出る。池は全面雪で埋まっている。ビシターセンターを見学後バスで小笠原さんの車が置いてある赤倉スキー場のパーキングに戻り、14時頃には宿で有るユアーズインに戻り、本日も温泉をゆつくりと楽しみ。のんびりとする。そうこうする内にスキー組も16:30には帰ってきた。小亀さんは明日は用事があるとの事で、帰途に着き、一昨日より杉の原に行っていた広島女史が、スキー組と共に登場し一段と賑やかになる。食後も昨日と同じように食堂でお喋りと色々なビデオを楽しんだ。

2月3日(月)晴

本日も起床は6時だ。天候は良く未だ明けやらぬので星が綺麗だ。全員今日は黒姫スキー場へと移動する。不要な荷物はそれぞれの車に乗せて9時に出発する。黒姫スキー場には9:30には到着し、食堂で13:00集合し、食事後解散とした。スキー組は昨日参加した広島さんをいれて6名となり、スノーシュー組は小亀さんが昨日帰ったので4名となったる本日もスキー組と別れて小笠原さんの案内でゲレンデ脇の何も踏み後のない樹林帯を自由に歩きまわり、雪があるので、普段歩けないところや、沢山の兎や貂、鹿等の動物の足跡を見ることが出来、スノーシュー参加者は大いに満足し、案内してくれた小笠原さんには大感謝だ。

集合時間も迫ってきたので、スキー場に戻りスキー組を探すと菊池さんの姿発見。他の人たちは見つからない。携帯で連絡をすると他の人たちは既に食堂に入っているとの事。僕

たちも食堂に向かい 11:50 着昼食を摂る。休憩後解散として横田さんは自分の車で、菊池さん、高橋さん、清登さんと廣島さんは、菊池さんの車で帰り、あとの者は黒姫高原駅まで送ってもらい、石原さんは明日よりは山スキークラブの雪崩講習会の世話役の為に白馬に向かうとの事で、ユアーズインに帰って行った。武田さんとは長野で別れ、また東京駅で西谷ご夫妻と別れて、今回の楽しかった旅が終わったのだと実感する。又次回もこの会に参加しますので、企画する人は大変でしょうが、宜しくお願いします。

スノー合宿報告（スキー組）

記 菊池武昭

2月1日（土）

妙高高原駅で12時10分着の田矢さん、竹田さんと合流し、今回の宿「赤倉ユアーズ・イン」に13時過ぎに到着。今日は全員でのイベントは無いので、14時頃より高橋さん、清登さん、菊池の3名は、赤倉観光リゾートスキー場にて足慣らしを行う。スカイケーブルで上がった前山コースで高橋さんの指導を受けながら足慣らしを行う。この日は雪質も非常に良く滑り易かった事もあり、高橋さんの指導で少し上手くなった気がした。16時に小笠原さんの送迎車でユアーズインに戻る。

2月2日（日）

本日は、高橋さんがお腹の調子が悪いとリタイヤしたため、スキー班は石原さん、横田さん、清登さん、菊池の4名となった。昨日と同じ赤倉観光リゾートスキー場でスキーを楽しむ。天候は時々小雨が降ったり、日が照ったりし、気温は昨日より高く、春先の様な重たい雪質だ。午前中は中級の前山コースを滑っていたので、そこそこ皆さんに付いていった。午後になって、お腹の調子が良くなった高橋さんが合流してからは、より急傾斜のコースを滑ることになり、まず国体女子コースを滑り、次いで急傾斜の壁の有るチャンピオン B コースを滑った。国体女子コースはそこそこ滑ることが出来たが、チャンピオン B コースの急斜面では、コースを外れるのではないかと恐怖に駆られ全くスキーに成らず、皆さんに迷惑を掛けてしまった。また、最後の滑りでは、私が膝痛のため皆さんと逸れてしまい、高橋さんには大変ご迷惑を掛けてしまった。

2月3日（月）

本日はスキー場を変え黒姫高原スキー場に行く。ユアーズインで朝食を頂き、スノーシュー班と一緒に車に分乗し黒姫高原スキー場に向う。昼前迄スキーを楽しみ、スキー場の食堂でスノーシュー班と一緒に昼食を取り。昼食後解散し、各々家路についた。

名峰マナスルの山麓をめぐるトレッキング報告

川井 靖元

まえがき

マナスル峰はネパールヒマラヤ山群の中央部にあり、標高8163mの世界第8位の高峰である。日本人による世界初登頂の8000m峰で、戦後の混乱期に3回の登攀を試み1956年に榎有恒氏率いる日本山岳会隊が初登頂に成功した。今回の

撮影トレッキングは登山基地であるサマガウン迄カトマンズからヘリコプターを利用し、プンゲン氷河BC(4000m)とマナスル湖BC(3500m)でのテント宿泊、

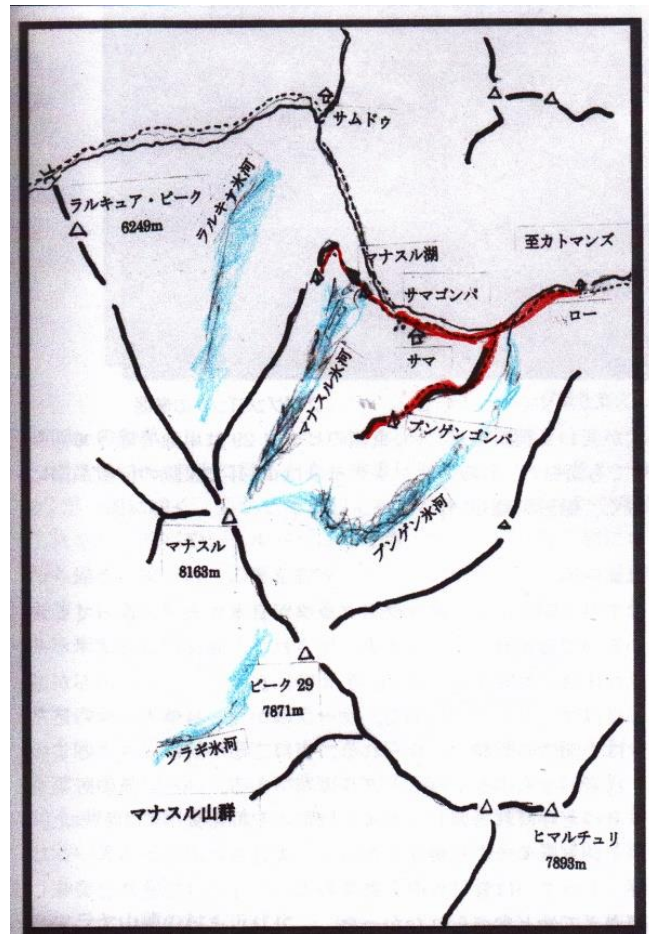
撮影が出来るような、比較的短期間のツアーを宮原魏氏のヒマラヤ観光開発に依頼、11月8日～19日に催行された。

カメラマン3人のトレッキング

メンバーはヒマラヤ経験の豊富な山岳写真作家森田氏(JAC 会員)、ヒマラヤ初めての金起煥氏(韓国山岳写真家)と小生の3名である。サマでの滞在を8日間とし、すべてテント宿泊とした。トレッキング隊としてはサード兼ガイド1名、シェルパ兼カメラポーター2名、クッキングスタッフ1名、シェルパニポーター(女性)5名が付き総勢12名である。

マナスル登山基地サマ

サマはマナスル峰をめぐるサーキット街道上にあり、一番北側に位置する。首都カトマンズから約200km、車が全く入れないため、通常片道約7日間歩かなければならない。世界中からマナスル峰を目指す登攀者やトレッカーが多く訪れるが、エベレスト街道やアンナプルナの街道に比較すると静かな人口700人ほどの村である。村の西側の丘にはゴンパ(チベット仏教の寺)あり、トレッカーのためのロッジ、バッテイ(招待所)が5軒あり、450頭ほどのヤクの牧場と麦畑、薬草採取が村の収入源である。谷の北側を流れる川には小さなダイナモ(発



電機)が設置されており、夜のみ村の各家に照明用の電気が送られている。

ブンゲンゴンパは日本人の寄進

60 年前にマナスル峰初登頂のために登山隊は第 1 次～3 次 3 回のチャレンジをしたが、第 2 次登山隊はサマの手前のローで村民の反対運動に会い、あえなく撤退した。そのため日本隊は多額の寄進をした。その結果第 3 次のチャレンジで 1956 年に登頂に成功した。今回われわれがブンゲン氷河ルートでテントを張った場所は、日本隊の寄進により出来たブンゲンゴンパが建つキャンプサイトである。もちろんこのゴンパで僧侶の読経のもとに安全祈願をした。

マナスル峰の撮影ポイント

マナスルをめぐるトレッキングコースはよく整備されているが、目的は撮影でありテントサイトを朝または夕方に撮影条件が良い場所を選ぶことにした。又高度を上げすぎると懐に入ってしまう山の形状等が悪くなってしまう。

そのためサマ村とその周辺を彷徨ったが、北側のカルカ(牧場)の上部、マナスル湖北側のカルカ、ブンゲン氷河ゴンパ周辺、ブンゲン氷河 BC の 4 カ所が撮影ポイントになる。特に南峰、北峰の位置関係が変わるので、下から見るとそれぞれの形状が変わり判断が難しい。東側のピーク 29 は単独で撮っても良いが、マナスルと組み合わせても面白い。名峰のヒマルチェリは 11 月で太陽の位置が南に寄るため日が当たる時間が短く、撮影が難しい。

トレッキング中のクックメニュー

サマに入ってからのご飯はすべて同行のクッキングスタッフが日本人向けに作ってくれる。サマでパンが焼かれているので毎朝食パンと日本粥が出された。食後には必ずネパールティーが出る。このお茶は起床時、毎食事後の他 10 時、3 時にも出てくるのでがぶがぶ飲んで高山病を防止する。お昼はラーラとパンである。ラーラはかつて日本人が持ち込んだインスタントラーメンで今は中国製の乾麺から作られる。夜はご飯か焼飯にさまざまなオカズとスープが出てくる。代表的なものを上げるとタルカリである。いろいろの野菜を入れたカレー煮である。シャクパと呼ばれるカレーライスは辛さを抑え食べやすかった。モモはチベット風水餃子で、インド風モモより美味しかった。夜食毎に出るダルスープは豆のポタージュスープで好評、トゥクパは骨付き肉と野菜の入った汁そばで意外と美味しかった。ヤクのステーキは硬過ぎて殆ど食べられなかった。

サマの地酒ロキシー

シェルパが高所キャンプでよく飲んでいる酒はロキシーと呼ばれる一種の焼酎である。ネパールの山岳民族は畑で採れた大麦、米などの雑穀を炊いて発酵させ濁り酒チャンを作り、これを蒸留してロキシーが出来る。かなり強いお酒で、ここ 4000m で酒の弱い日本人 3 人には盃を交わすことは出来なかった。アメリカ(CNN)ではロキシーは世界の美味しい飲み物ベスト 50 に入っているそうであ

る。

4000m の香草

標高 3500m以上に登ると森林限界付近ではクリーム色のバルー(日本のキバナシャクナゲ)が一面に咲く。しかし冬を迎えるこの時期花は落ちやや厚ぼったい葉は暗褐色になる。これをシェルパやシェルパニはみな葉っぱのみ刈り取り袋にコンパクトに詰め込んで家に持ち帰る。家ではこの葉を乾燥して、サンボルと呼ぶ銅の器(香炉)に入れて燻し、部屋中を芳しい香りにするそうである。ネパールではこの他にヒマラヤスギの葉を香炉で燻し香りを楽しむ習慣もある。

サマのシェルパニ

今回のトレッキングではポーターに 5 人のシェルパニが付いた。5 人とも地元サマ生まれで、全員 20 歳以下の未婚のはたらき盛りの娘さんである。通常男性のポーターは 30~40 kg 背負うが、彼女たちは最大 25kg の装備を背負ってわれわれをサポートした。サマ村は若い男たちは出稼ぎに出ているので、彼女たちが実質的に村を背負っているのである。

お笑いタレント・イモト アヤコがマナスル登頂

われわれパーティーがサマに入る一ヶ月ほど前の 2013 年 10 月 2 日にイモト アヤコがマナスルの登頂に成功した。この撮影記録はその後 11 月 10 日に日本テレビ系の番組「緊急放送世界の果てまでイッテ Q」イモト アヤコ 8163m のヒマラヤ登頂なる」が全国放映された。この種の番組では今までにない 20.8 % の高視聴率を稼いだそうである。一流の山岳ガイド、山岳医、沢山のスタッフ、ポーターを引き連れていったから登頂出来たのだとか、スポンサーのお金があったから出来るのだと巷の話題になっている。しかし普通の芸能人がマナスルに登るには大変厳しい登攀技術訓練、体力トレーニング、高度順化訓練に耐えて成し得た結果である。このイッテ Q で既に彼女はアコンカグア、マッターホルンに挑戦している。イッテ Q の次の 2014 年の企画はチョモランマだそうである。

ヒマラヤ山麓の村も近代化

ヒマラヤ奥地の村サマも少しづつ近代化され、世界中からのトレッカーが増え、泊るバッチェもベッドのあるロッジ化が進みつつある。日本人が開校した？小学校は 5 年制から来年は 6 年制変わるとのこと。ケイタイは衛星電話以外に、村の中だけで交信できるものが使われていた。悪天候の日以外はヘリコプターによるカトマンズとの往復便があり、村の真ん中にある小さなコンビニの店先に置かれる食品雑貨はカトマンズにあるものと同じになっている。又何年か先にこの地を旅するチャンスに恵まれたら、もっと快適な山旅が出来るようになると思われる。



白馬杓子岳（クルマユリ）

山 想 倶 楽 部 会 報 誌 V o l : 1 0

発行日／平成26年5月1日

発行者／日本山岳会同好会：山想倶楽部

編集人／石原達夫 高橋 聡 大塚幸美